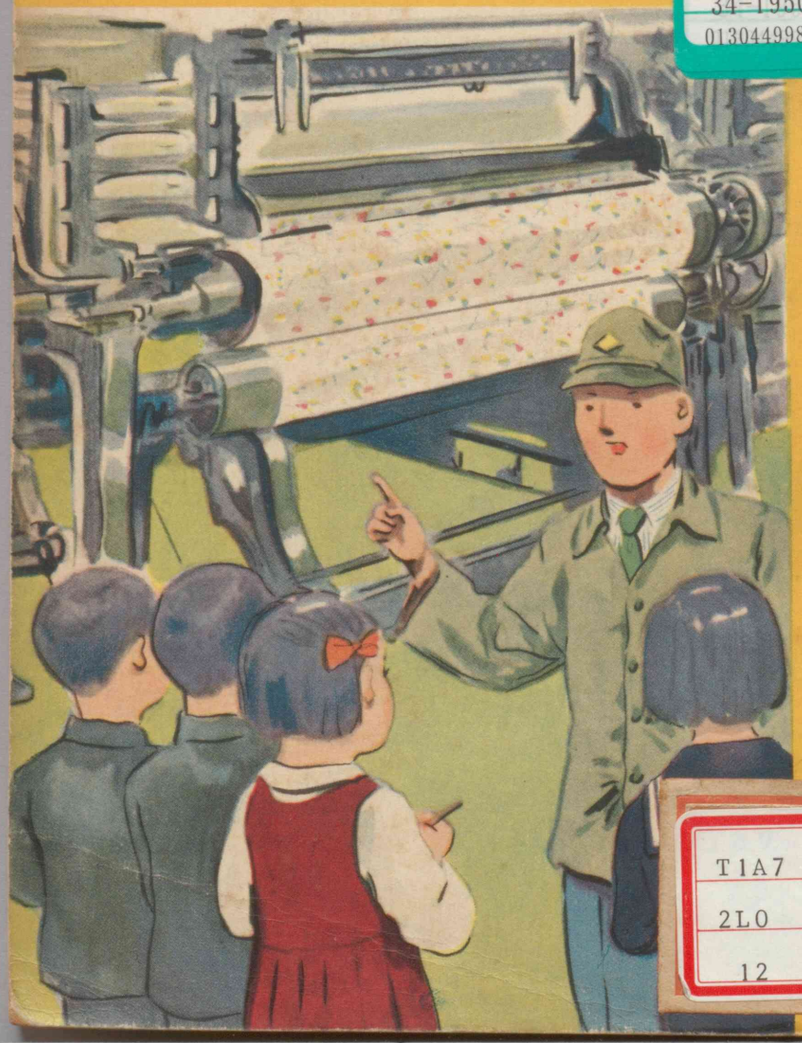
12
二葉
小社403

世の中はすすんでいる

教科書文庫
6
301
34-1950
0130449981

文部省検定済教科書
新教育実践研究所著



社会科四年

T1A7
2LO
12

60C13
教科書文庫
6
300
34-1950
01304
49981

教科書文庫
6
301
34-1950
0130449981

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校社会科用

世の中はすすんでいる

―今とむかし―

社会科第四学年　全

広島大学図書
0130449981

中央図書館

広島大学図書
0130449981

もくじ

一　私たちの村　五

二　べんりな世の中　一五

○今のたびとむかしのたび　一五

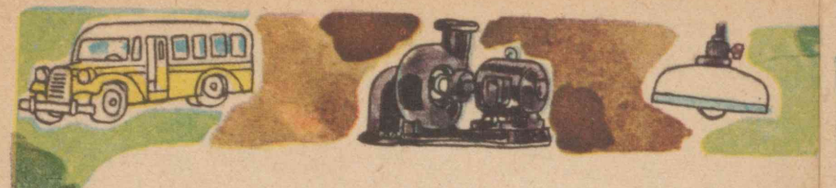
○一郎のたより　三〇

三　今とむかし　四八

○おじいさんの話　四八

○いろいろな家　六三

○物の売り買い　七七



四　きかいの力　九五

○とりいれ　九五

○せい材所　一〇九

○おり物工場　一二六

五　たのしいくらし　一四〇

○明かるいへや　一四〇

○ねんりょう　一五四

○井戸と水道　一六八

○べんりな台所　一七五

みなさんへ

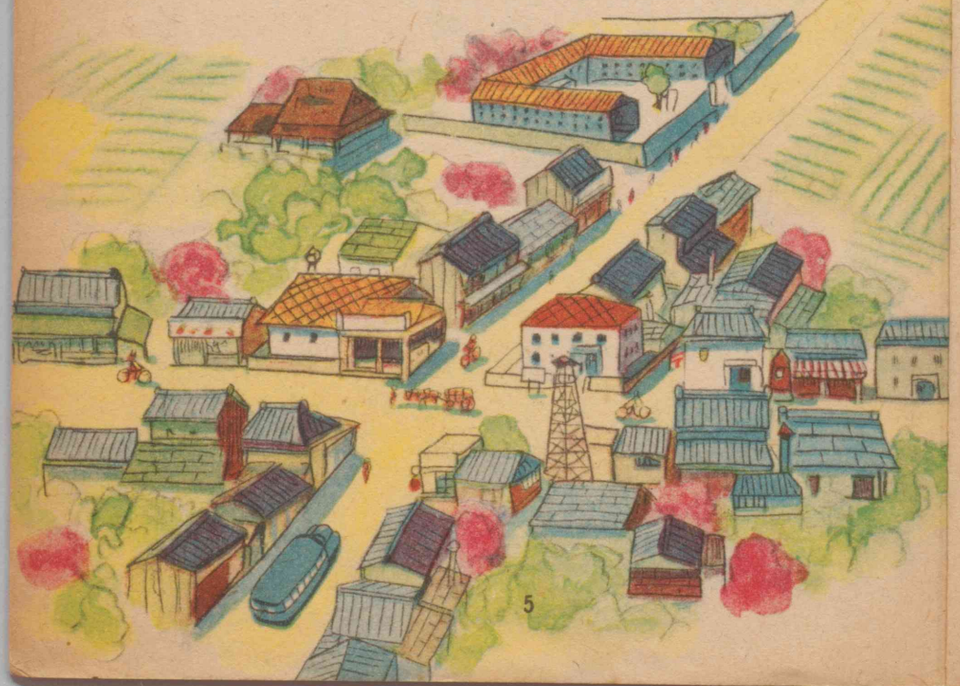
この本には、まさおやはつえたちが、なかよく、力をあわせて、村の今とむかしのくらしについて、話をきいたり、見学したり、じっさいにしらべたり、もけいをつくったりして、けんきゅうをしたことが書いてあります。このけんきゅうをして、まさおやはつえたちは、世の中をすすめるためには、人々のたすけあいや、ほねおりがどれほど大切なものであるかということがわかりました。

みなさんも、まさおやはつえにまけないように、今のくらしとむかしのくらしをくらべて、世の中がどのようにすすんでいるかということをしらべてみましょう。

一　私たちの村

学校のもんを通ってから、みんなはいつものようにひろいけん道に出ました。

そのけん道に出たところが、四つつじになっていて、かどに役場と、のうぎょうきょうどうくみあいがあります。このへんは、この村のまん中といってもよいところで、ゆうびんきょく、ちゅうざい



所、そのほか、いろいろな店などが集まっていて、いつも人通りの多いところです。

けん道を横ぎって、まっすぐに行くと、電鉄の武井駅があります。

役場の前には、バスのていりゅう所があって、五、六人の人がバスを待っていました。

かず子は、その中にだれかしっている人を見つけたらしく、そばによって行きました。

「ああ、おじさんだ。どこへいらっしゃるんですか。」

「やあ、かず子さんか、今、学校の

帰りかね。わしは、これから天神の田中さんのところへ出かけるところだ。バスが通るようになったので、天神へ行くのもたいへんらくになっていいよ。」

「ほんとにいいですね、帰りにはおよりになりますか。」

おじさんはにっこりして、

「きょうは、つごうがわるくてね。こんどよるよ。おとうさんやおかあさんによろしくね。」

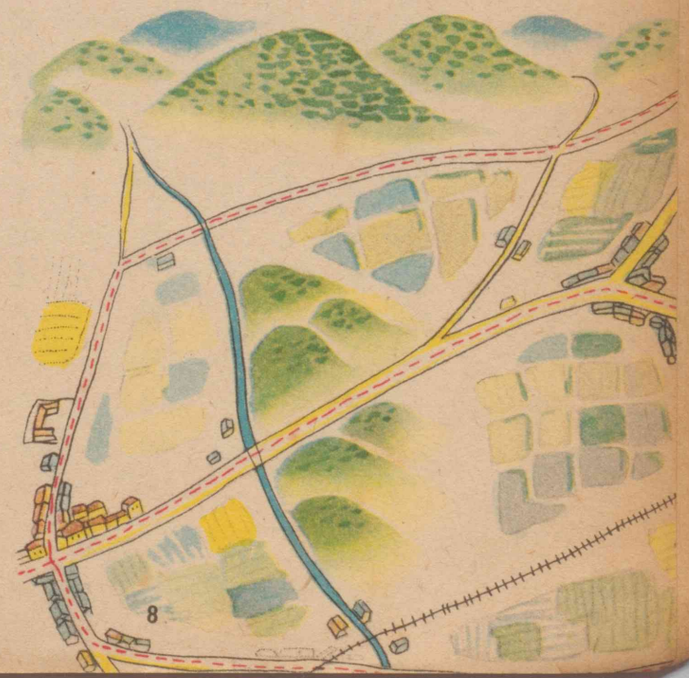
「そうですか。では、さようなら。」

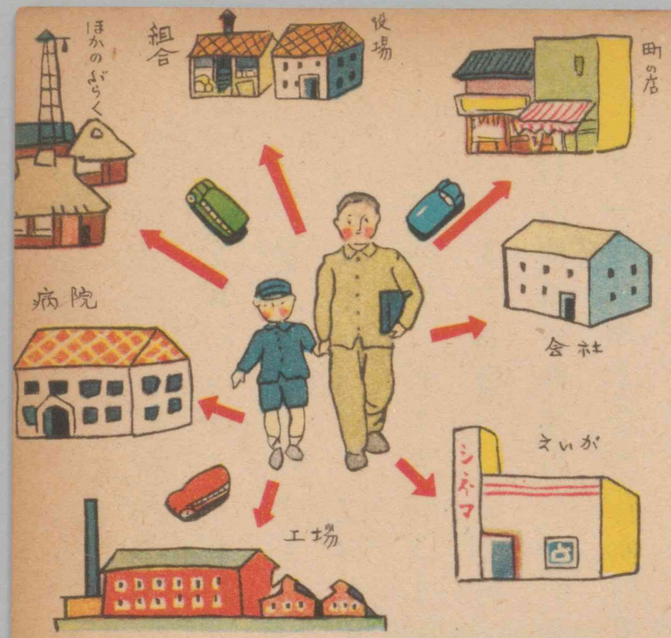
かず子はまえのように、みんなといっしょに話しながら、あ

るきはじめました。

バスはつい一しゅう間ほどまえからけん道を通るようになったのです。おかげで、部落と部落の間を、バスでかんたんにいききできるようになりました。

それから、町のかいしゃや工場につとめている人は、遠い電鉄の駅まで出なくとも、部落に近いていりゅう所からバスでかようことができるようになりました。かず子たちは、バスが通るようになって、たいへんべんりになったことを話しながら、あるいていました。





「家では、おとうさんが、役場や、のうぎょうきょうどうくみあいに行くのにバスができて、とてもべんりになったといっておられたよ。」

と、あきらがいいました。

「あるいたり、自てん車に乗ったりするのは、たいへんですものね。わたしなんか、バスができたおかげで、町へちょいちょい行けるのがうれしいわ。」

と、よし子がいいました。

「町へ行くと、なんでも売っているからね。本屋さんだって、た

いていの本がそろっているよ。おととい、ぼくはバスで町へ本を買いに行ってきたよ。」

と、ひろしがいいました。

「町へえいがやしばいを見に行くにも、バスが通るようになったので、とてもつごうがよくなったね。」

と、まさおもいいました。バスが通るようになったので、この村の部落と部落のつながりや、村と町のつながりが、今までより一そう深くなったわけです。

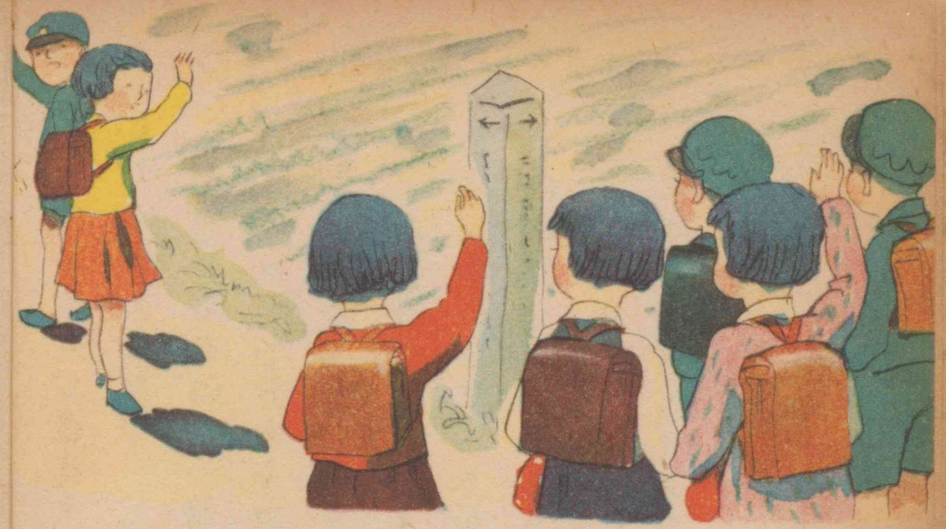
このようなことを話しながら、まさおやよし子たちは、ことぶき橋をわたりました。橋の下には、山の方からきれいな水が流れてきて、気もちのよい音をたてています。

その時、材木をつんだ一台のトラックがどどどっと、地ひびきをたてながら通りすぎて行きました。

「あっ、あれはせい材所から町へ材木をはこぶトラックだ。」

と、あきらがさけびました。みんなは、さかをのぼり、おかをきりとおした道をすぎました。

家はだんだんと少なくなって、道のりょうがわに、麦畑とくわ畑と水のない田がひろがっています。ずっと北の方には、みどり色にかがやく山々がそびえています。



「わたしたちがこんど遠足するのはあの山かしら。」

と、はつえが指をさしました。

道しるべがたっているところで、はつえとあきらが、

「さようなら。」

といって、左の方の道を家へ帰って行きました。ここから東田町へ行く旧道になっているのです。

けん道にそっては、あたらしい家が、どんどんたてられていくし、けん道を通る人や車のかずは、年々多くなって

いくけれども、旧道は年々さびれていくばかりです。山道でもあり、その道のはばもせまいためでしょう。

みんなで手をふって、はつえとあきらを見おくっていました。

その時、かず子のおじさんたちを乗せたバスが、いきおいよくそばを通りすぎて行きました。

家が近くなると、みんなの足は、しぜんとはやくなってきました。

まゆをつんだリヤカーや荷馬車がつづいて通りました。ラジオ屋さんの前で、よし子とまさおは、みんなとわかれました。二人は、

新しくたてられた電ちゅうのところにくると、たちどまりました。

よし子の家のだっこくきや、もみすりきのモーターを動かすための電線が、この電ちゅうからひかれているのです。

「よし子さんの家もモーターが使えるようになったから、とりいれの時は、ずいぶんらくになるね」。

と、まさおがいいました。よし子は、にっこりして、

「ええ、おとうさんも、とてもよろこんでいてよ」。

と、うれしそうに答えました。

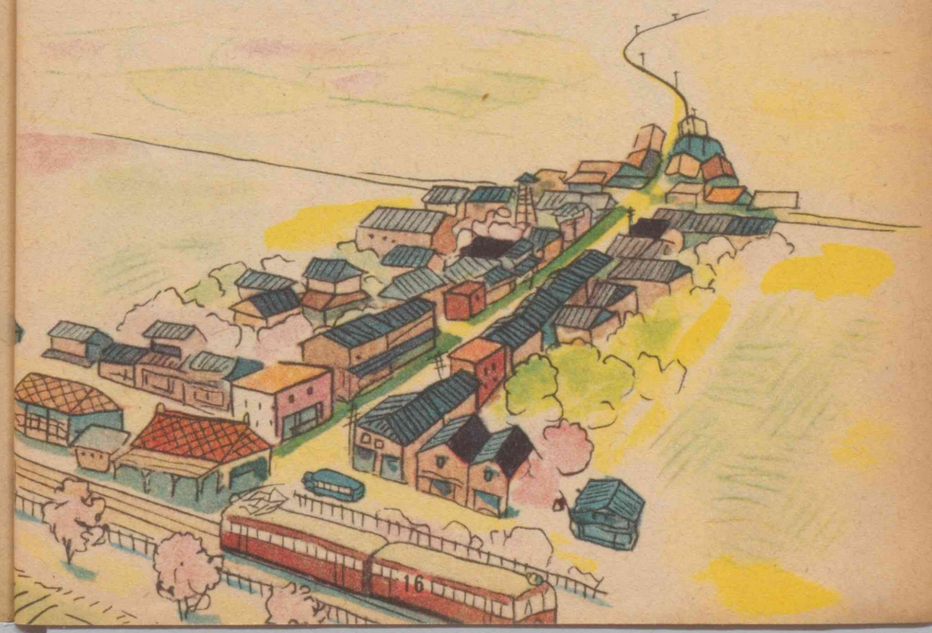
二　べんりな世の中

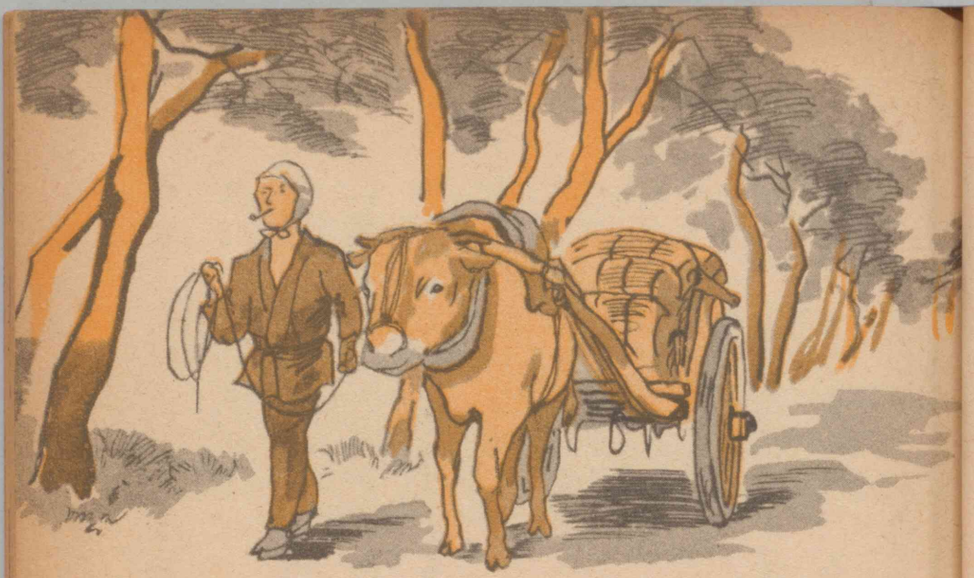
○今のたびとむかしのたび

野も山もあたたかい日の光をうけて、草木のみどりが目にしみこむようです。遠足は山王とうげときまりました。武井駅から電車に乗って出かけるのです。

みんなは駅の前でおとなしく待っていました。つううんがいしゃの人が、とまっているかもつ車に、荷物をはこび入れています。バスがついたので、おきゃくがどやどやとおりてきて、しゅっさつ口の前に、一列にならびました。かいさつ口を先生につれられて通る時、駅いんが、

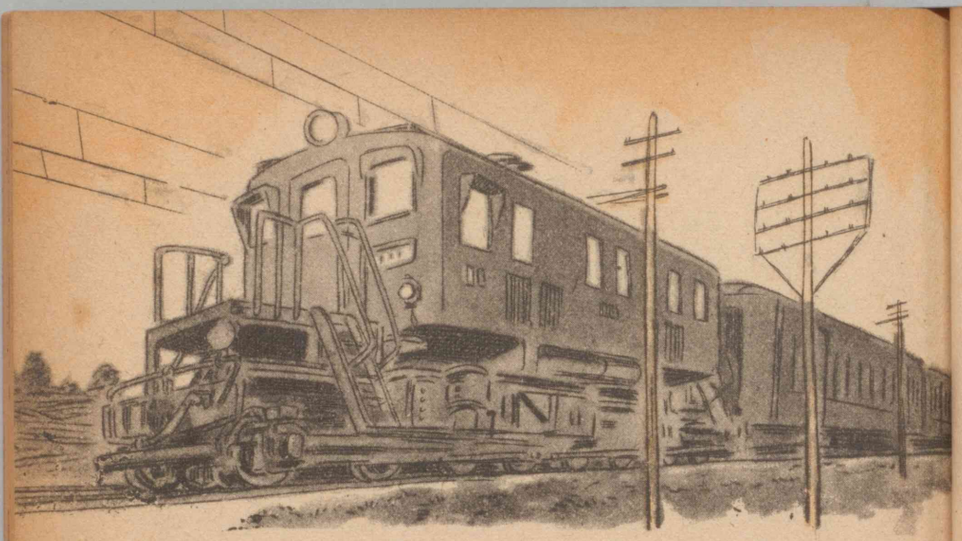
「きょうは遠足ですか。天気がよくていいね。」
と、いいました。
しんごうのむこうに電車が見えてくると、タブレットをもった駅長さんが、ぼうしをかぶりなおして出ていきました。
電車がはいってくると、駅いんはがたんとポイントをきりかえました。先生のごちゅう意のとおり、みんなは一列になって電車に乗りました。電車が走りだすと、それ





をたのしみに待っていたみんなは、大よろこびです。
「早いね。自てん車なんか、たちまちおいぬいてしまうよ。」
よしおの指さすかい道には、町へ行く牛車がのろのろとあるいています。電車は鉄橋をわたり、田畑の間をぬって走っています。遠くの方には、黒いけむりをあげて、汽車が走っているのが見えます。
まさおは、となりにすわっている先生にいいました。

「先生、このつぎの遠足には汽車に乗りたいと思います。」
先生はにっこりして、
「そうね。このつぎは汽車に乗ることにしましょう。でも汽車に乗ると、きかん車のえんとつのごみが目にはいったり、きものがよごれたりするのでね。電気きかん車だといいがね。」
まさおはいいました。
「汽車もだんだん電気きかん車になるのですか。」
先生は、
「じょう気きかん車も、ずいぶんくふうされてよくなったが、それでもまだ石炭の使いかたにむだがあるのです。日本は水の力にめぐまれているのだから、石炭のむだをなくすためにも、きかん車を電気で動かすということは、とくに大切なこ



とだと思います。」
とおっしゃって、わらいながら、
「まさお君、汽車はどのくらい早く走るのだか、知っていますか。」
と、おききになりました。
「このまえしらべましたら、とくべつきゅうこうがさいこう九十五キロでした。先生、汽車のなかったころは、たびはずいぶんたいへんだったでしょうね。」
先生はにこにこして、
「むかしはわらじばきで、かたから荷

物をさげて、てくてくとあるいたものです。むかしはやど屋というものも少なかったので、夜は野じゅくすることもありました。

江戸（東京）にしょうぐんがすむようになって、国ぜんたいの大名が一年おきに、江戸と自分のりょう地との間をおうふくするようになってから、かい道もよくなり、たびもだいぶらくになりました。それでも江戸と大阪

の間は五百キロメートルほどありますが、二十日もかかりました。それに時にはわるものも出て、けっして安心できませんでした。

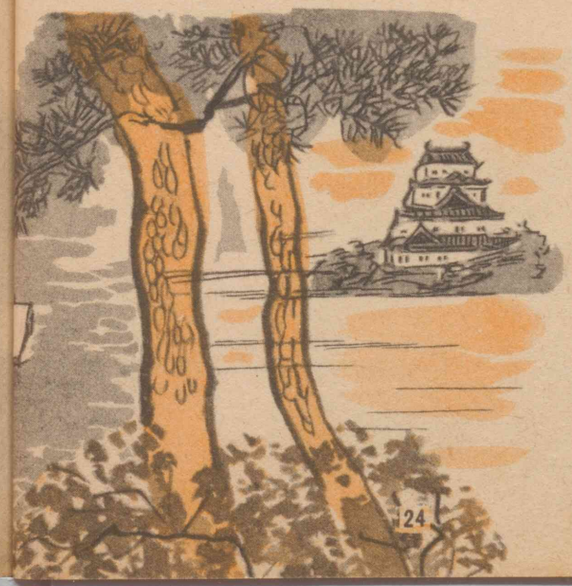
まさおは先生のお話をきいて、きょ年の夏の夜、村の人たちがやじきたのしばいをしたことを思い出しました。今はわずか九時間で東京と大阪の間を、とくべつきゅうこう列車が走ります。むかしにくらべて、ほんとうにべんりになったと思いました。

電車のまどからは、山が近くに見えるようになってきました。

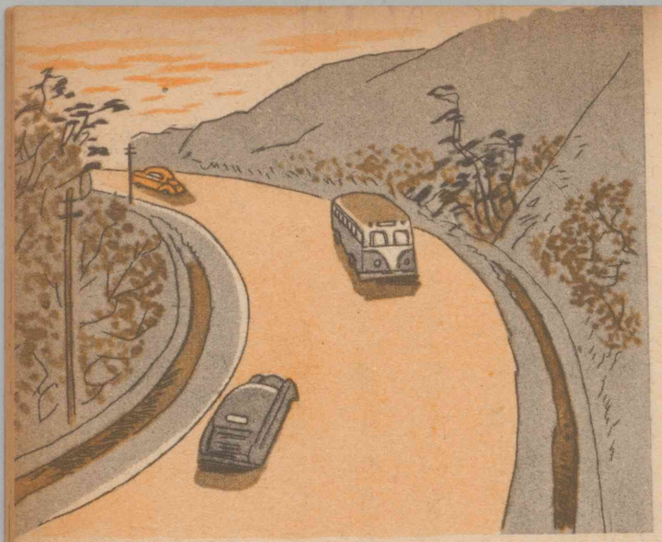
先生はまわりにいる、としおや、たけしたちにも、お話をなさっています。

「ですから足のよわい人や、いそぎの用のある人は、馬に乗ったり、かごに乗ったりして行きました。それでも今のたびのようにらくではありませんし、ひ用も多くかかります。とくべついそぐ時は、はやかごといって、人足が、前に二人、うしろに二人、かけ声もろとも、いちもくさんに走るのですが、中のおきゃくも、なかなかたいへんです。こしをしっかりかごにむすびつけて、てんじょうからさげたつりてにつかまり、はちまきをして夜ひるねずにがんばります。ほんとうにいのちがけです。それでも三日はかかりました。みなさんのきょうの遠足とくらべてごらんなさい。それにむかしのたびは乗物だけがくろうだったのではありません。しょうぐんや大名は、いつも、てきにそなえるひつようから、川には橋をかけさせなかったり、せき所をおいたものですから、たびびとはわたしぶねに乗ったり、人足のかたに乗ったりしてわたらねばなりません。せき所では、どこのものだかを、とりしらべました。江戸から出てきた女の人は、とくべつにきびしくしらべられたものです。それにもし大

雨がふって水かさがますと、川どめといって、水が少なくなるまで何日でも、やどで待っていなければなりませんでした。けれども世の中がおだやかになるにつれて、しょうぐんや大名たちは、国の中をしっかりおさめるために道をよくしていきましたが、それでもむかしの道はまがりくねっている上に、きゅう



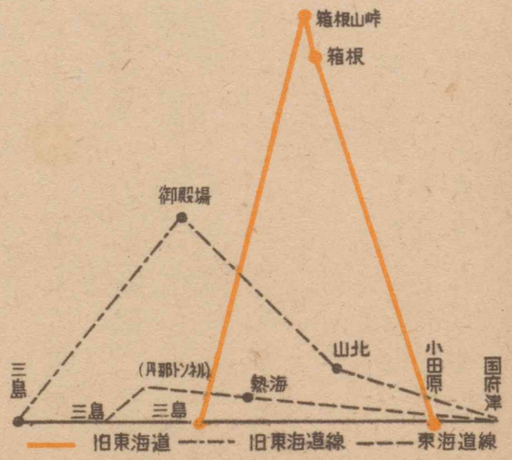
なさか道も多かったものですから、とうげをこすのには、ほんとうにくろうしました。」



今まで山の間を走っていた電車は、この時、ごおっと音をたててトンネルにはいりました。

「トンネルだ。」

と、たけしはさけびました。まさおはまっくらなまどを見つめて、おじいさんがい



つか、

『今はけんざかいにトンネルができたので、らくに白川村に行けるけれども、むかしはたいへんだった。足のよわい人は、わざわざ遠まわりをしなければならなかった。』

と、話をしてくださったことを、思い出しました。そして電車がトンネルを出ると、すぐにその山を見あげて、むかしはこの山もあるいてこしたのだな、と思いました。

「さあ、みなさん、おりるしたくをしなさい。このつぎの駅でおりますから。」

という先生の声で、かず子も、まさおも、おりるしたくをはじめました。電車をおりてから、みんな元気よくあるきだしました。ふみきりをこえると、すぐ山道になります。とうげに行く

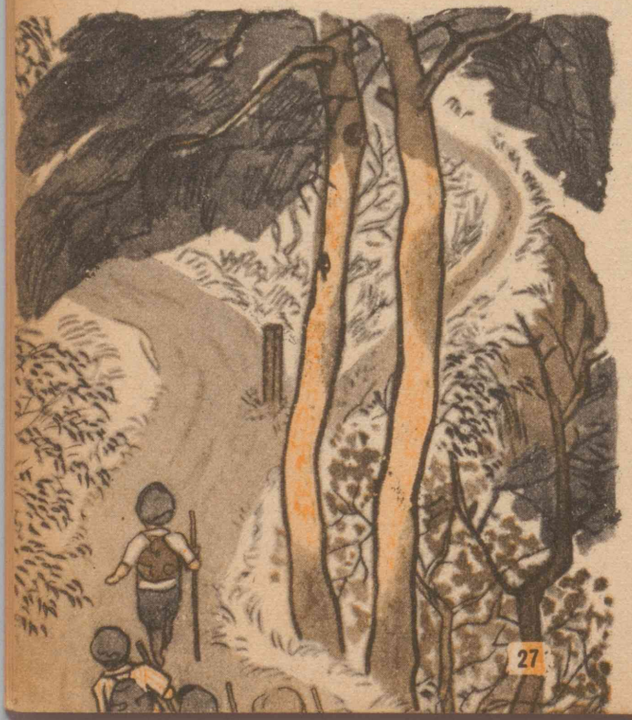
みちしるべが立っています。右の方の道は旧道なのでしょう。草が道のまん中にはえています。

「ああ、くたびれた。」

といって、としおが道ばたの石の上に、こしをおろしました。かず子は水とうの水をのんでいます。

「もうじきとうげですよ。一町ごとにじぞうさまが立っていますから、かぞえてのぼりなさい。」

先生の元気な声がきこえます。まさおもあせをふいて、またあるきだしました。山の上の方では、



お友だちをよぶ声がします。だれかもうとうげについたのでしょう。石ころにつまずかないように、気をつけてあるいていたまさおの目の前が、きゅうに明かるくなりました。あせばんだかおにすずしい風があたります。とうげについたのです。よしおとみち子は、とうげの一本杉の下に、こしをおろしています。

「まさおさん。ごらんなさい。さっきの駅があんなところに見えてよ、ほら、電車がはしっている。遠くから見ているためか、のろのろしているわね。きっとひこうきから見るとこうよ」。

みち子の指さすとおり、ほんとうにはこにわのようです。

「お家はどっちの方かな。ぶじにここについたことを早くおかあさんに知らせてあげたいね。むせん電話があるとよいのだが」。

と、としおはいいました。まさおは、あの山のむこうに、この三月にかわっていったなかよしの一郎がいる町があるのだな、と考えながら、かたのリュックサックをおろしました。

○一郎のたより

一時間目のはじまりをしらせるかねが、カァーン、カァーン、カァーン……と、高らかになりひびきました。先生のいらっしるのを、みんなはしずかにお待ちしていました。

やがて、先生がおみえになり、朝のごあいさつをすませました。先生は手に一通の手紙を持っていらっしゃいます。

「町の学校にうつった一郎君から、おたよりがありましたから先生が読んであげましょう。」

とおっしゃって、ゆっくりと読みはじめられました。

四年一組のみなさん。お元気ですか。ぼくは元気で町の学校

へかよっていますから、ご安心ください。近ごろは、学校にもなれて、お友だちもできました。

さて、みなさんの遠足は、もうすみましたか。ぼくたちは、この間、千が崎のとう台に遠足をしました。きょうは、その時のようすをお知らせしましょう。

千が崎のとう台は、ぼくのいる町から汽車に乗って、一時間ばかりで行ける海岸にあります。小高いおかの上にあるそのとう台についたのは、ごぜん十時ごろでした。とう台のおじさんが出てこられて、とう台のやくめについて、かんたんなせつめ

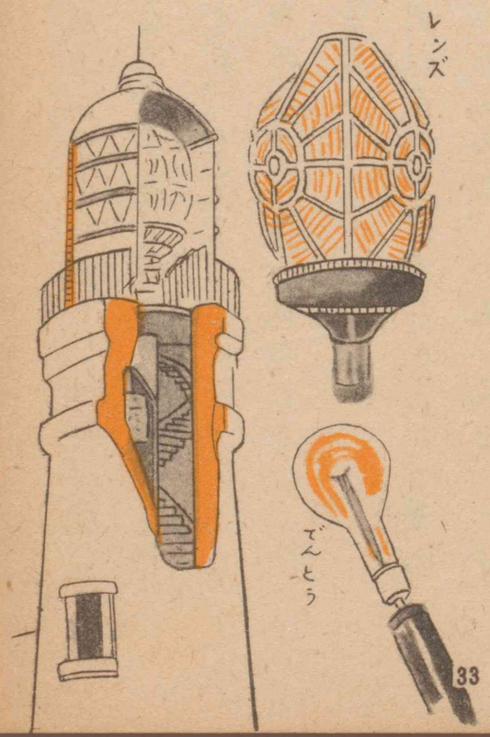
いをしてくださいました。それから、とう台にのぼりました。とう台の上はせまいので、はんにわかれてのぼりました。ぼくは、一ばんはじめにのぼるはんでした。

せまい入り口から、うすぐらいとう台の中にはいると、石づくりのかいだんがぐるぐるまわっていて、上にのぼるようになっています。

ぼくたちは、元気よくのぼって行きました。さいごには鉄のはしごにつかまって、物見台に出ました。

目の前には、青い海がひろがっていて、太平洋の波がいわにぶつかり、しぶきをあげています。下を見ると、ほかのはんの人が手をふっています。ぼくも、「おうい。」といって、手をふりました。あまり高いのでこわいようです。

そこから、また鉄のはしごをつたわって、あかりのつくへやにのぼりました。大きなレンズの中に、大きい電球がついています。夜になると、この大きなとう台の目玉が、ぴかりぴかりと光って、くらい海を通る船のみちしるべになるのだそうです。



あんないのおじさんは、きりがかかって光の見えない時にならすサイレンのこと、むせん電しんでとう台と船をつなぐ話など、わかりやすく話してくださいました。そして、いよいよぼくたちがおりようとした時に、とう台のわきの高い鉄のとうに、ひるがえっているたくさんのはたを指さしながら、

「このはたは、あなたがたの言葉のようなもので、いろいろなはたを組みあわせて、海を通る船と話をするのです。」

といわれました。海の上の船と、とう台とをれんらくするのにも、いろいろあるものですね。

ぼくたちは、とう台を見て、とう台のおじさんたちのごくろうを、しみじみ感じました。どんなひどい風にも、雨にもまけないで、海の上の船をまもっておられるおじさんたちには感心しました。

では、またおたよりします。みなさん、おからだをたいせつに。さようなら

五月二日

山口　一郎

四年一組のみなさんへ

先生は一郎の手紙を読みおわると、みんなにむかって、

「一郎君の手紙はたいへんじょうずに書けていますね。とう台のことがよくわかったでしょう。」

と、おっしゃいました。すると、たけしが、

「先生、むかしもとう台はあったのですか。」

と、たずねました。

「そうですね、今のように大きくてりっぱなとう台はありませんでしたが、むかしはとうみょう台といって、あぶらしょうじでかこった中で、菜たねのあぶらに火をともしたものを、船のみちしるべとしていましたし、それよりむかしは、ひるまはのろしをあげ、夜はかがり火をたいたそうです。」

と、先生はおっしゃって、つぎのような話を、つけくわえられました。

「今の世の中では、なにかいそいでしらせたい時には電しんでも電話でも使えます。ところがむかしは、そういうものはありませんでした。

ですから、人がかけて行ったり、馬に乗って走って行ったり、かいならしたたかに手紙をつけてとばしたりしたようですが、いくさの時、てきがせめよせてきた時などは、それでは、

まにあわないので、のろしや、たいこや、はたなどをあいずによく使ったようです。のろしやたいこやはたのあいずは、いくさの時ばかりでなく、ふだんでものろしやかがり火を、とうだいのかわりとして使ったように、いろいろなことに使われていました。たいこやはたなどが、今でも使われているのをみなさんは、知っているでしょう。」

先生のお話がおわると、みんなで一郎君に返事を書こうということになりました。

まさお、たけし、はつえ、まつ子たちは、とくべつ一郎となかがよかったので、四人の返事を一つのふうとうに入れて、出すことにしました。

まさおたち四人は、学校の帰りに切手を買いに、ゆうびんきょ

くに行きました。

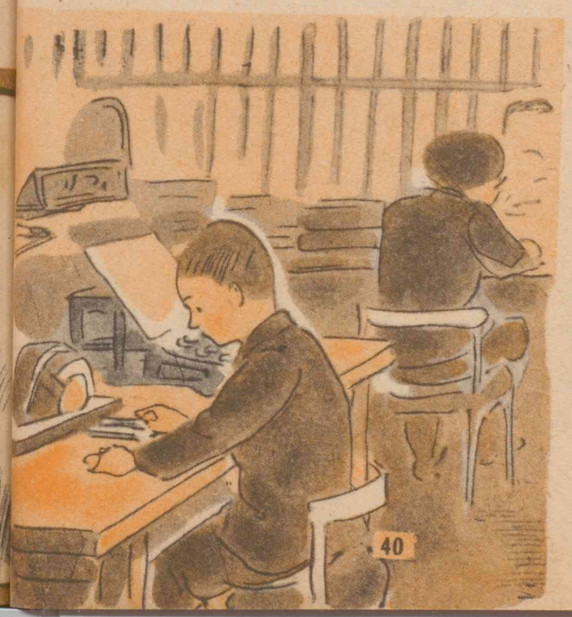
ゆうびんきょくの中には、人が四、五人いました。四人は、しばらくようすを見ていました。

「これを、そくたつでおねがいします。」

どこかのおねえさんが、一通の手紙におかねをそえて、まど口にさし出しました。

きょくいんが、それをはかりにのせて目方をはかると、すぐふうとうの上に赤インクで線をひきました。

「あのう、いつごろむこうにつきますか。」
「あしたつきます。」
それをきくと、おねえさんは、安心したようにまど口をはなれました。つぎは、おばさんで、
「電ぽうをおねがいしますよ。」
といって、文の書いてある紙を出しました。このおばさんは、きょくいんを知っているらしく、
「とても大きいですよ。」
とか、
「この電ぽうがついたらよろこぶでしょう。」



とか、話していました。話のようすでは赤ちゃんの生まれたことを、中津町にあるおよめさんのおさとへしらせる電ぽうのようです。夜の七時ごろには、むこうにつくというのですから、まさおはその早いのにびっくりしてしまいました。
そのほか、電話をかけている人もあります。小づつみを出しにきた人もあります。かわせをくんでもらっている人もあります。まもなく、まさおたちの番がまわってきたので、切手を買って、一郎へ出す手紙のふうとうにはると、おもてへ出てポストに入れました。
帰り道に、こうしんずかあたりまでくると、むこうから、

チリン、チリンと自てん車のベルをならしながら、ゆうびんはいたつの正作おじさんがさかをおりてきました。

「やあ、おじさん、どこへ行ってきたのですか。」

と、たけしがよびかけました。おじさんは、ちょっと自てん車をとめると、

「たけぼうか、ゆうびんをはいたつしてきたところだよ。おじさんは、またこれからきょくに帰って、電ぽうがあったらはいたつしなけりゃあならん。いそぐからごめんよ。」

と、元気よく、ペダルをふんで、走って行きました。

「正作おじさんは、三十年もゆうびんきょくにつとめているんですってね。」

と、まつ子がいいました。

「まだ一日もやすんだことがないんだって。えらいね。」

と、まさおがいいました。

「わかいころには、自てん車にも乗らずにあるいて、ゆうびんをはいたつしたそうだよ。足が強いんだね。」

と、たけしがいいました。すると、はつえが、

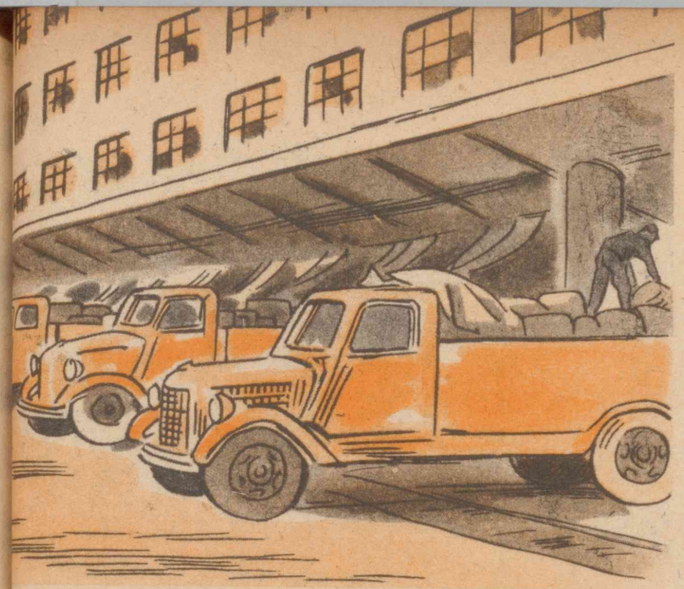
「たけしさん、むかし手紙をはこぶ商売があったでしょう。あれ、なんといったかしら。」

と、たけしにたずねました。

「ひきゃくじゃない。」

と、たけしがいいました。
「そう、そう。そのひきゃくよ。正作おじさんなら、ひきゃくがつとまると思うわ」
と、はつえはまじめなかおをしていいました。
「でも、正作おじさんは、この村だけの手紙をはいたつするんだけれども、むかしのひきゃくは、江戸と京都や大阪の間を手紙を持って、走って行ったというのだから、たいへんだったと思うな」
と、まさおがいいました。
「リレー式に手紙をはこんだのだそうだけれども、ずいぶんたいへんだったろうね。それにこの間、本で読んだのだけれど、江戸じだいのはじめごろにひきゃくを使ったのは、みぶんの

高い人やぶしだけで、ふつうの人は使えなかったそうだよ。のちになって、商業がさかんになると、町びきゃくというひきゃくをふつうの人も使うようになって、毎月、三回大阪と江戸の間をゆききしたということだよ。それからはだんだんひろまって、日本中でひきゃくが使われるようになったそうだ。江戸と大阪の間をふつう六日ぐらいかかったのだって、今なら二日ぐらいで手紙がとどくけれどね」
と、たけしがみんなに話しました。
三人は、たけしがひきゃくのこと



についてよく知っているのに、感心しました。

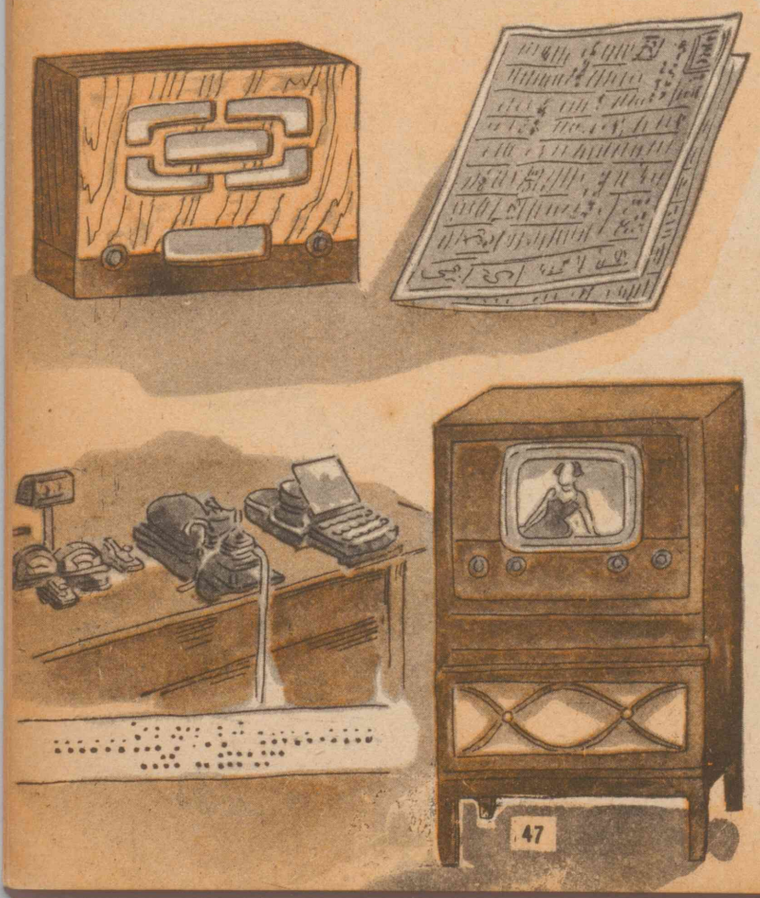
「でも、人が手紙を持って、走って行くなんて、むかしはたいへんだったのね。今なら電ぽうもあるし、電話もあるし、あてなが書いてあって、切手さえはってあれば、手紙であろうが、小づつみであろうが、どこへでもとどけてくれるのですものね。ほんとにべんりだわ。」

と、はつえがいいました。

「それだけではないよ。今の人は家の中にすわったままで、新聞を読

んだりラジオを聞いたりして、日本はもちろんのこと、世界中でおこったでき事をくわしく知ることができるんだからね。」

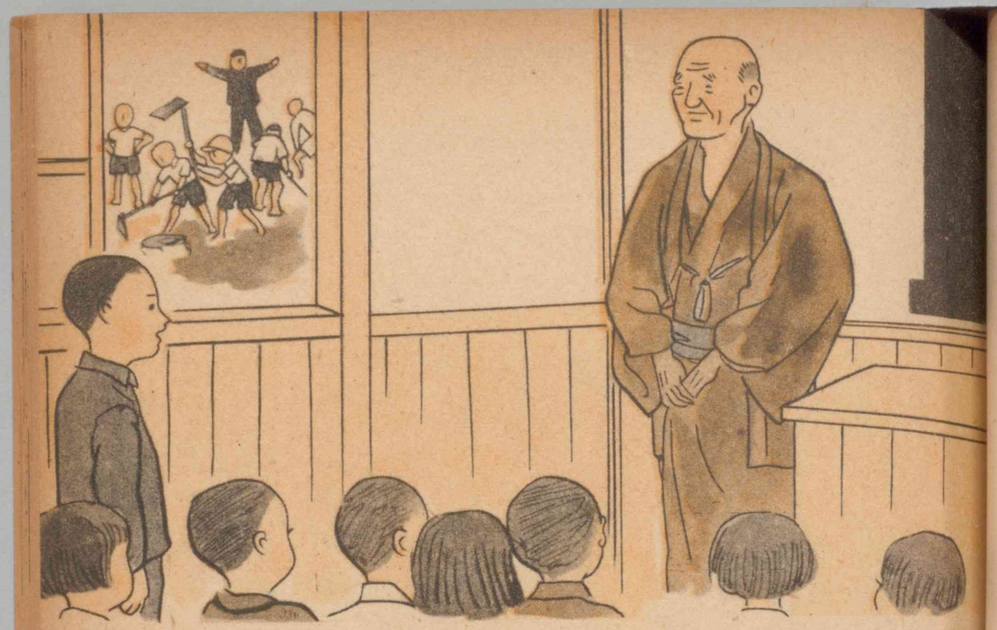
と、まさおがいいました。



三　今とむかし

○おじいさんの話

きょうは学校のうえんをひろげる日です。おひるから五六年のせいとたちは、学校のうらのやぶを切りひらいて、くわで土をほりかえしたり、みんなで力をあわせて、木の根をぬいたりしています。どろをつんだ車が通ると、ガタガタいう音が教室のまどからきこえてきます。ぼくたちはみち子さんのおじいさんから、むかしの人がくろうして、この村を切りひらいた話をきくことになっています。まもなく先生が、みち子さんのおじいさんをあんないして、教室にはいってこられました。



「きょうは五年や六年の人たちといっしょにのうえんには出ないで、みち子さんのおじいさんから、この村のむかしのことを、おききすることになっていましたね。おじいさんのお家はもと名ぬしといって、今の村長さんのようなしごとをなさっていましたから、この村がどのようにしてひらけてきたか、よくごぞんじです。ではみなさん、お話をよくおききすることにいたしましょう」。

先生のごあいさつがおわると、おじいさんは、

「わからないことはなんでもきいてください。」

と、いって、げんきに話をはじめました。

「みなさんは、村ざかいのけん道のところにたっている石ひを知っていますか。今から百年ばかりまえ、村の人たちが力をあわせて、大川から村に用水をひいたくろうが書かれているのです。むこうのおかから学校まで、いちめんの田となったのは、この用水ができてからです。それまでは水がなかったものですから、此の近くは畑となっていて、むぎやあわなどしかつくれなかったのでした。」

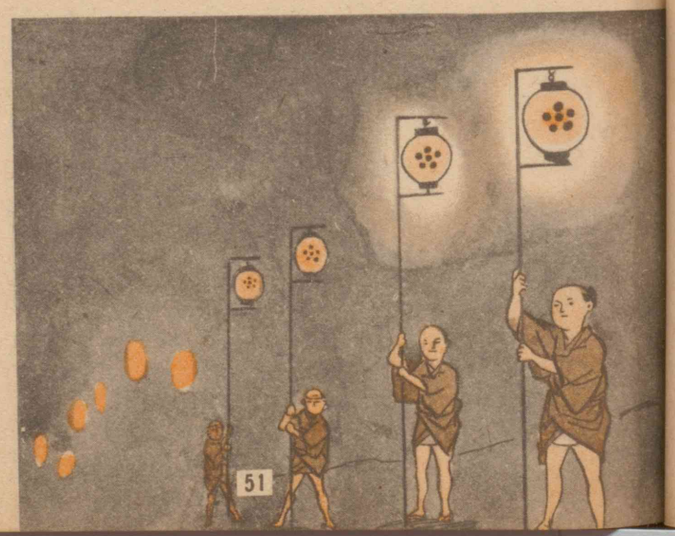
すると、三郎が手をあげてたずねました。

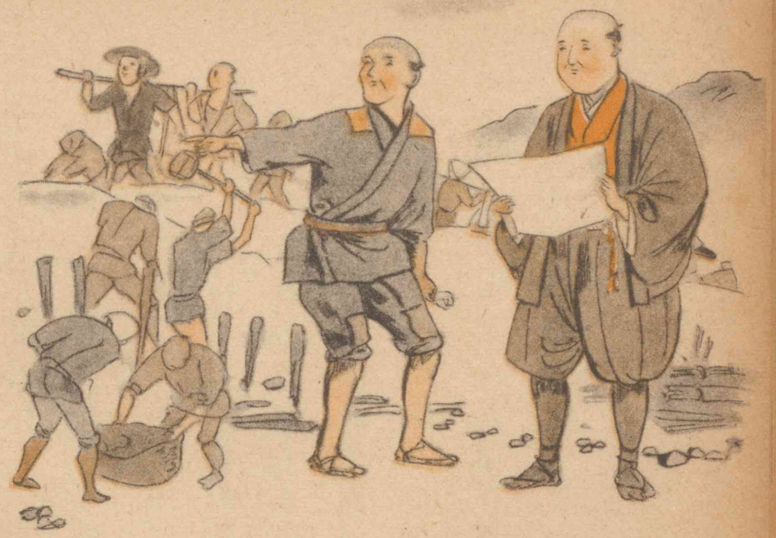
「そのころはそくりょうも十分にはできなかったでしょうに、

どうやってほったのですか。」

おじいさんはにっこりして、

「それには、村中の人が、同じ長さのぼうのさきにちょうちんをつるして、夜ならんで立つと、あそこが高いむこうがひくいと、よくわかります。それでもきかいの力のすすまないむかしのことですから、大仕事だったそうです。とりわけ大川の水のとりいれ口は、川の水をせきとめねばなりませんので、わたくしのおじいさんは村の年よりたちと、二宮尊徳のところまでおしえをうけに出かけたということです。そのころ





二宮尊徳は、田畑のかいこんやおとろえた村をおこすことに、すぐれたせいせきをあげていたので、多くの人々がおしえをうけに行きました。

こんどはとしおが、

「二宮尊徳という人は、少しのひまもむだにせず、よく勉強した人だとばかり思っていました。」

と、いいました。おじいさんはうなづいて、

「二宮尊徳は、おとろえた村をおこすことや、あれた土地をか

いこんするというしごとには、じつにあかるい人だったようです。その上、人間ひとりの力はよわいけれども、なかよく力をあわせてやれば、大きな仕事もでき、のちの世の人にもよろこんでもらえると、いつも人にいいきかせておりました。この村の人は、むかしからたいそうなかがよいので、そのような大仕事もよくできたのですよ。」

と、いいました。

「名ぬしというのは、どういうことをするやくめなのですか。」

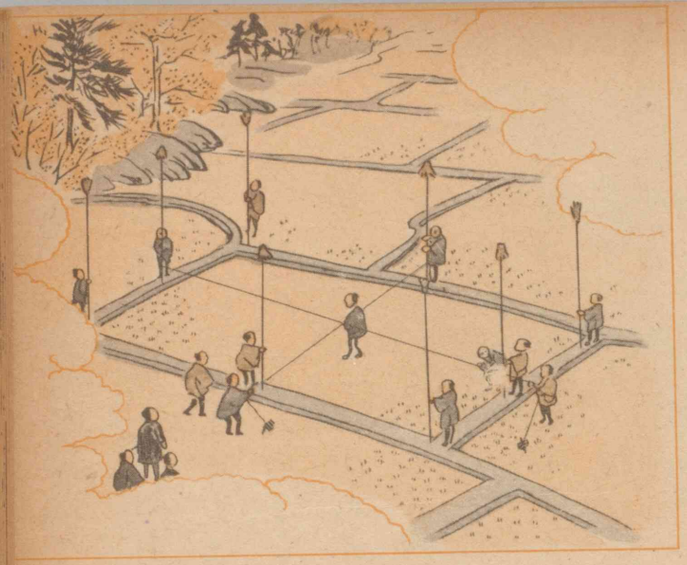
と、まさおがたずねました。おじいさんは、

「ああ、名ぬしという役ですか。」

といって、

「村の世話役の事なのです。西の方ではしょう屋といっていま

した。しょうぐんや大名から、まずしい人や病気のためにくるしんでいる人をすてておいてはいけない、村中でたすけてやれというおふれがよく出されましたが、それを名ぬしが、村中の人にしらせたり、とのさまにおさめる年ぐのわりあてやとりたて、道ろや川のつつみをなおしたり、橋をかけたりする仕事のかんとくとか、そのほかいろいろなあらそいのさいばんなど、なかなかせきにんがおもく、いそがしい役でした。名ぬしになる人がはじめからきまっていて、その人一だいかぎりのこともありました、また村の人たちがせんきょでえらぶこともあって、それぞれ土地のようすにより、いろいろだったのですが、たいていはその村がひらかれた時からいる人が、親子だいだい名ぬしになりました。



つぎにけい子が立って、

「そんなでしたら村の人もくらしよかったでしょうね」。

と、たずねました。おじいさんは、とんでもないというかおをして、

「むかしは、ぶしがいちばんみぶんの高い人ときめられ、のうぎょうをする人がそのつぎで、それからだいく

さんなどの職人、いちばん下は商人というじゅんに、みぶんはひくくなるとされていました。そしてのうかでうまれた人や、職人、商人の子などは、親からうけついだ仕事をしなければいけないとかたくきめられ、ほとんどぶしにはなれませんでした。こうして考えてみると、ひゃくしょうはかなりたいせつにされたようですが、それはひゃくしょうがだいじだというのではなく、そのつくる作物をだいじに思っただけで、それをつくる人間は、ずいぶんそまつにされたようです。さけや、ちゃをのんではいけない、たばこをのむな、夜おそくまではたらけ、米のめしはぜいたくだから食うな、などときびしくいいつけられたものです。こういう時とのさまと村の人たちの間にはいって、くろうするのが名ぬしでした。年ぐ

は少しでもよけいにとりたてればよいと、考えていたぶしが多かったのですからたまりません。自分の持っている田畑でも、じゆうに売り買いすることはとめられていました。

今とはずいぶんちがうでしょう。みなさんがもしぶしの世の中の時のように、おとうさんのしているしごとのほかはしてはならないとか、また自分の物を売り買いしてはいけないと、かたくきめられていたらどう思いますか。ずいぶんきゅうくつだと感じるでしょう。

教室の中はしんとしました。みんなはかおを見あわせています。すると、まさおが元気よく立ちあがりました。

「おじいさん、どのさまやぶしたちは、多くの人をたいせつにしなかったのですか。」

おじいさんは、にっこりうなずいて、

「そうではありません。しょうぐんの徳川吉宗は薩摩（今の鹿児島県）からかんしょ（さつまいも）を江戸にとりよせて、食べ物のふそくをたすけました。熊本の細川重賢や米沢の上杉鷹山などは、今でもその土地の人にありがたく思われています。そ

ういう人たちのところでは多くの人を大切にし、くらしをよくするために、いろいろよいせいじをしました。吉宗の時など、国ぜんたいの土地で、うまく使えるところは、すすんでかいこんするように、ねっしんにすすめました。この村のできたのも、その時だったといいます。この学校のあるところを新田というでしょう。わたくしたちのそせんが、ぞうき林を切りひらき、ざっそうをかりとり、いっしんにくわをうちこみ、木の根をぬきとって畑にしたのです。その時の書きつけを見ると、一日はたらいて、ひとりがやっと三十つぼぐらいしか、かいこんできなかったといいます。今はトラクターでやれば、一日一町ぶぐらいはかいこんできるということですが。」

先生は、外ではたらいているせいとの方をちらりと見ました。

まさおものうえんのしごとをたいへんだろうと思いました。

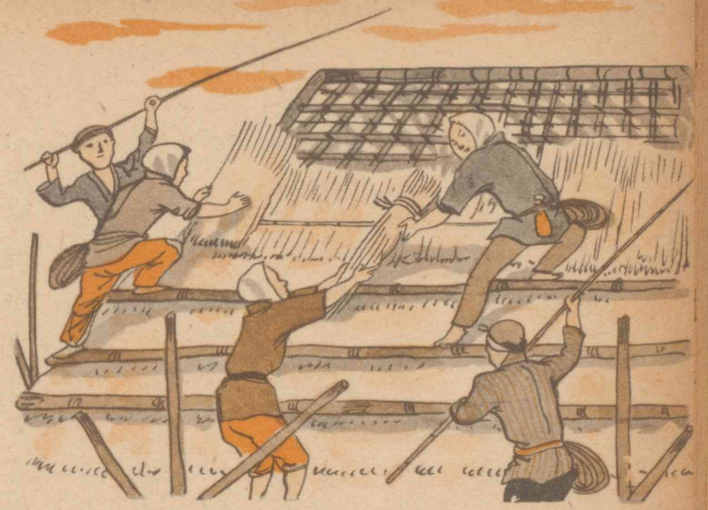
たけしがつぎにたずねました。

「むこうの山のふもとの村を、新村というのも、そのころできた村なのですか。」

おじいさんはうなずいて、

「そうです。この近くには、そういう名のついた村が多いですね。ところによっては別所とか出屋敷とか、いろいろの名がついています。なにしろ、それまで人がすまなかったところにすみつくのですから、そのくろうはなみたいていではなかったでしょう。水にもふべんで井戸を

ほっても、深くしなければいけません。ですから多くは、りっぱに作物ができるまで、いく年かの間、年ぐを出さなくてもよいということにしてもらっていましたが、それでもひとりやふたりの力ではとてもきゅうにはひらけません。どうしても、多くの人が力をあわせなければなりません。それでむかしから、のうぎょうをする人は、たすけあっていたのですが、あたらしくひらかれた土地の人たちはとくべつ力をあわせました。屋根をふきかえたり、家のふしんをしたりする時や、



また田うえやとりいれの時など、近くの人たちはそう出でたすけあいます。そのうちによろこびごとがあれば、みなでよろこびあい、かなしいことがあれば、みなでかなしみます。このようにして私たちの村は、きょうまでやってきたのです」。

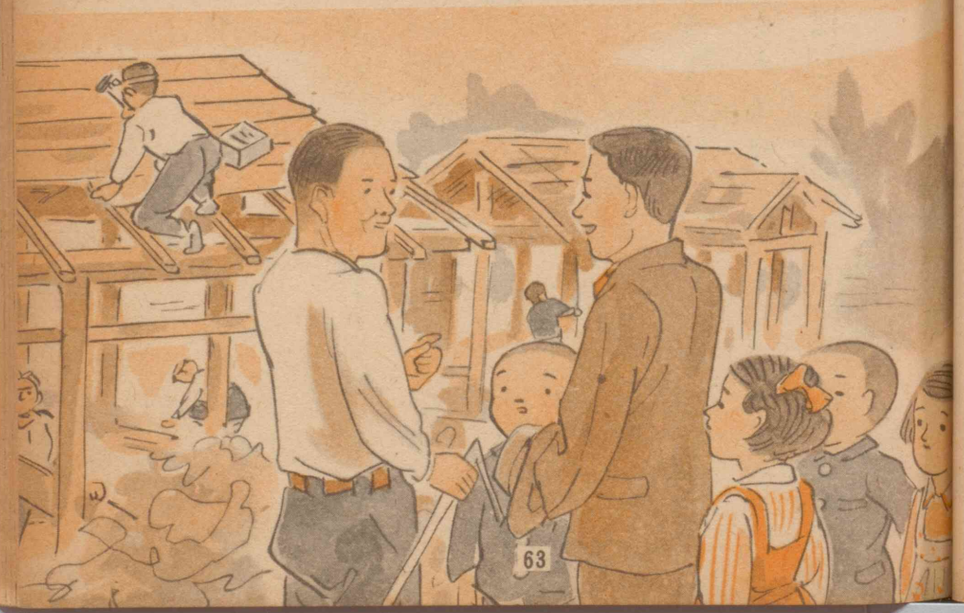
と、いいました。

まさおは、今まで、よく知らないでいた村のむかしのことをきいて、もう一ど自分の村のことを考えてみました。そしてきょうの学校の勉強は、ほんとうによかったと思いました。

○いろいろな家

よしおたちは、先生につれられて、セメントがいしゃのしゃたくをたてているふしん場にきました。よしおたちの組で、いろいろな家のもけいをつくることになり、材りょうの木くずをもらいにきたわけです。

だいくさんたちは、ちょっとしごとの手をやすめて、みんなをめずらしそうにながめていました。夏のはじめのたいようが、明かるくふしん



場をてらしています。

先生は、仕事のかんとくをしているおじさんのところへ行って、あいさつをされました。

やがて、先生のさしずで、木くずを集めにかかりました。木くずは、たくさんあるのですが、もけいづくりに使えそうなのは、あまりありませんでした。

しばらくさがしていましたが、先生がみんなをおよびになったので、先生のそばに集まりました。

先生は、かんとくのおじさんと、話をしていらっしゃいます。

「近ごろの家は、たてるのにおかねがかかるせいか、だいぶそまつになりました。ごらんなさい。はしらにしても、こんなほそい材木を使うんですからね」。

と、おじさんがいわれます。

「まあ、今はしかたがありませんが、だんだんともとのように、しっかりした材木を使うようにならないと、いけませんね。風やじしんに、びくともしないような家がたつといいですがね」。

と、先生がいわれました。

「そうですね。材木、セメント、石などよいものをえらぶとか、コンクリートづくりにするとかして、風やじしんや火事につよい家をたてたいものです」。

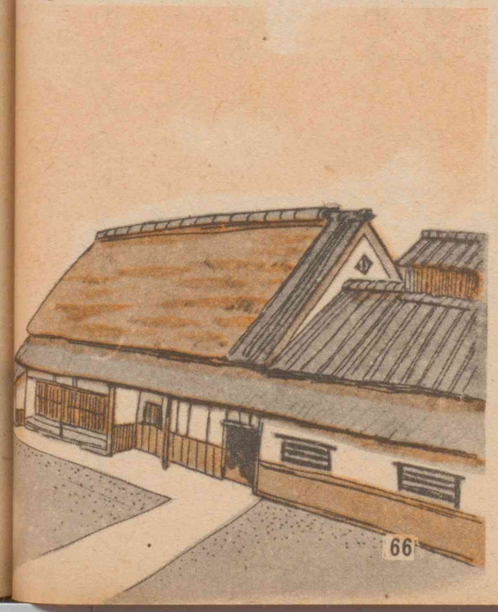
「むかしの家は、ほとんど木ばかりですが、しっかりした材木を使っていたよ

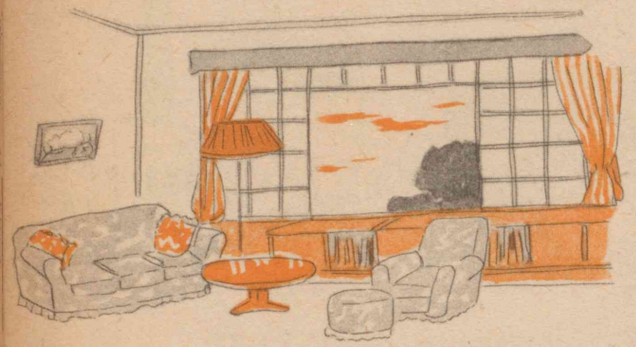
うですね。」

「しっかりした材木も使っています。この村の山田さんの家などのはしらや、はりなどは、みごとなものです。手いれもよいのでしょうが、たってから百年いじょうになるそうですがびくともしませんからね。」

「けれども、むかしの家は家の中がくらいし、まどりなども今の家にくらべると、むだが多いのではありませんか。」

「そうですね。家の中が明かるいことや、まどりがうまくできていることでは、今の家の方がすぐれています。





むかしの人も南むきに家をたてて、冬は、あたたかく、夏はすずしいようにしたり、風よけの林をつくったり、そのほかしっけのおおい日本の気こうにあうように、家のたてかたやたてぐをくふうしたりしましたが、近ごろの家の明かるさや、まどりには、およばないようですね。」

おじさんの話は、まだつづきそうでしたが、あとにまだ勉強がのこっているので、おじさんにお礼をいって学校へ帰りました。

木くず、わりばし、しょうじ紙、セロハン紙、あつ紙、小さなくぎ、など

が、もけいをつくる材料です。いよいよはんにわかれて、しごとにかかりました。

だい一ぱん　のうか
だい二はん　ふつうの家
だい三ぱん　役場
だい四ぱん　学校
だい五はん　店
だい六ぱん　工場

まさおは、はるえといっしょのはんで、のうかのもけいをつくることになりました。はるえが、自分の家

をじょうずにしゃせいしてきたので、それを見てつくることにしました。

まず、どだいつくりからはじめましたが、なかなかうまくいきません。みんなで、いろいろそうだんしたり、くふうしたりしてつくりました。ほんもののようなわら屋根をつくって、上にのせる時は、たいへんでした。

たけしのはんは、店のもけいづくりです。もう、『みどり屋ごふく店』というかんばんもできています。しごとをはじめてから、一しゅう間で、どのはんのもけいも、りっぱにできあがりました。

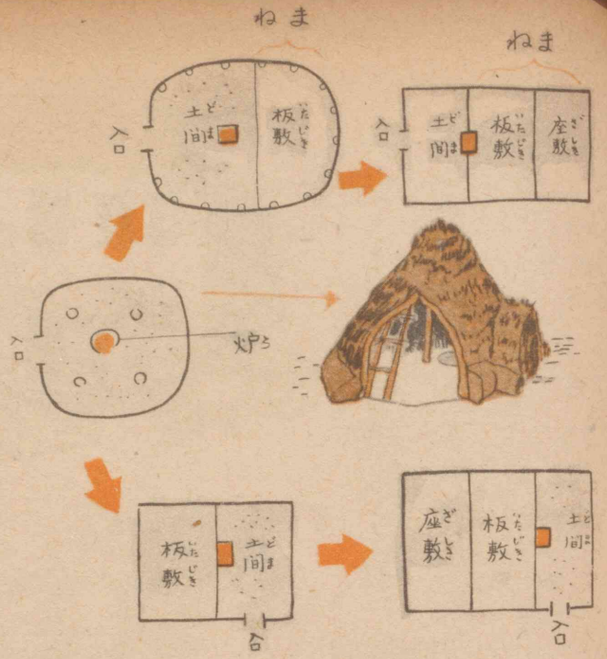
六つのもけいは、教室のつくえの上にならべられました。組の人たちは、その前に集まって、うれしそうにながめています。

先生は、

「どれも、よくできています。」

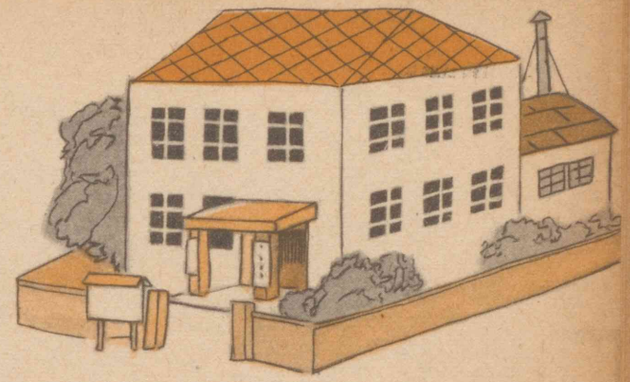
といって、ほめてくださいました。

けれども、だい一ぱんの人たちは、自分たちのつくったのうかのもけいが、ほかのはんのもけいにくらべると、ばかに古くさく見えるのが気になってしようがありませんでした。まさおは、とうとう先生に自分たちの気持を話しました。ところが先生はわらい



ながらつぎのようにお話になりました。

「のうかが古くさく見えるのは、あたりまえなのです。のうかは、ほかの家にくらべると、むかしの家のようすをたくさんのこしているのです。それは、日本ののうぎょうのやりかたが、今まであまりかわらなかったためだといってもよいでしょう。ですから、今ののうかをしらべることによって、むかしの家のようすを知ることができるといわれています。」



それから、先生は、つくえの上のもけいを一わたりごらんになって、

「このもけいの中で、どのたてものが一ばんあかるい感じがするでしょう。」

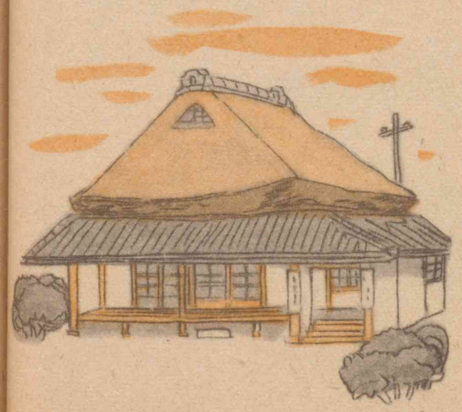
と、おたずねになりました。みんなは、口をそろえて、

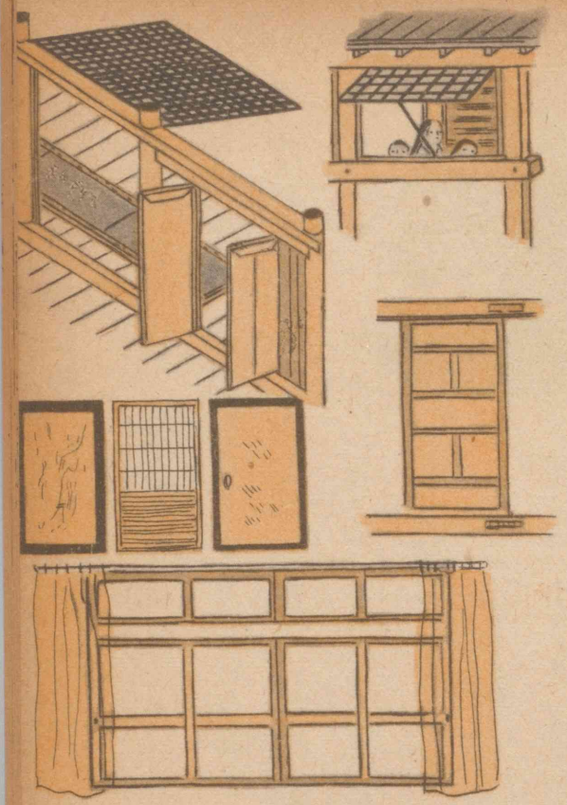
「役場です。」

と、いいました。

「やっぱり、西洋風のたてものは、明かるい感じがしますね。なぜだかわかりますか。」

といわれて、明かるくすみよい家にするためには、たてぐがむかしからどのようにかわってきたかを、話してくださいました。





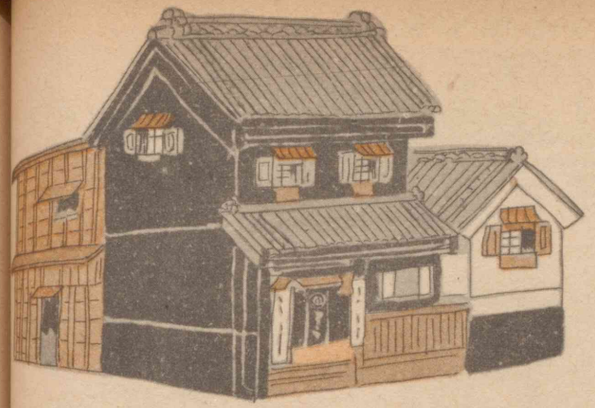
先生のお話がおわると、たけしが、

「先生、ぼくたちのもけいはどうですか。まちがっているところはありませんか。」

と、たずねました。

「いや、とてもよくできています。みどり屋ごふくてんにそっくりです。十年ぐらいまえには、二かいづくりの店というのは、みどり屋

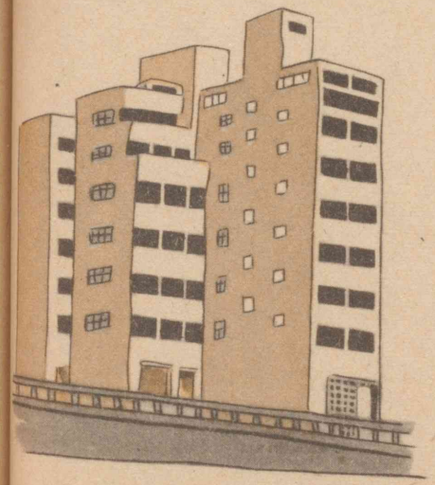
だけだったのですが、近ごろは、役場の近くに家がたくさんできて、土地がせまくなったためか、だいぶ二かいづくりの店が多くなりましたね。のうかの二かいは、かいこをかうためのものですが、店の二かいは人がすむためのものですから、おなじ二かいづくりでも、たいへんちがうわけですね。むかしでも、商ぎょうのさかんな土地では、二かいづくりの家が多かったようです。大名がしろをつくって、そこにすむことになると、かならずけらいを集めました。ですから、しぜんしろのまわりに町ができました。

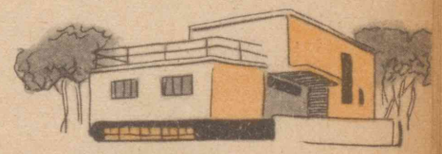


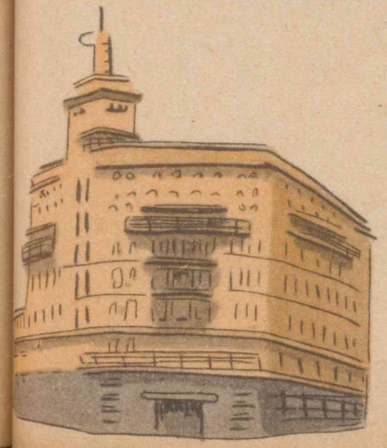
このような町をじょうか町といいます。じょうか町では、ぶしのすむところ、商ぎょうをするところと、はっきりわけてありました。そこで、商ぎょうがさかんになると、土地がかぎられているので、二かい家がつくられたわけです。ところが、江戸や大阪のような大都会では、火事が多いので、火事をふせぐどぞうづくりの家が、さかんにつくられるようになって、店のようすもだいぶちがってきました。明治になると、西洋風の家が都会につくられるようになり、大正・昭和にはいると、てっきんコンクリートのりっぱなビルディングが、たてら

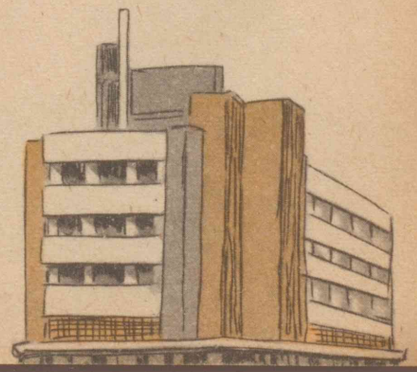
れるようになりました。」

先生は、そのほか、ふつうの家についても、わたくしたちのせんぞは、すんでいる土地のようすにしたがって、すみやすいようにくふうしたことや、東京や大阪にあるビルディングのようすなどを、おもしろく話してくださいました。









○物の売り買い

みんながたのしみにしていたもけいてんらん会もおわりました。たけしたちがこしらえたみどり屋ごふくてんのもけいが、一ばんよくできているといって、どの人にもほめられました。

そこで、このつぎは学級で、物の売り買いやこうかんについて、しらべることになりました。

「物の売り買いは、おかねでするので

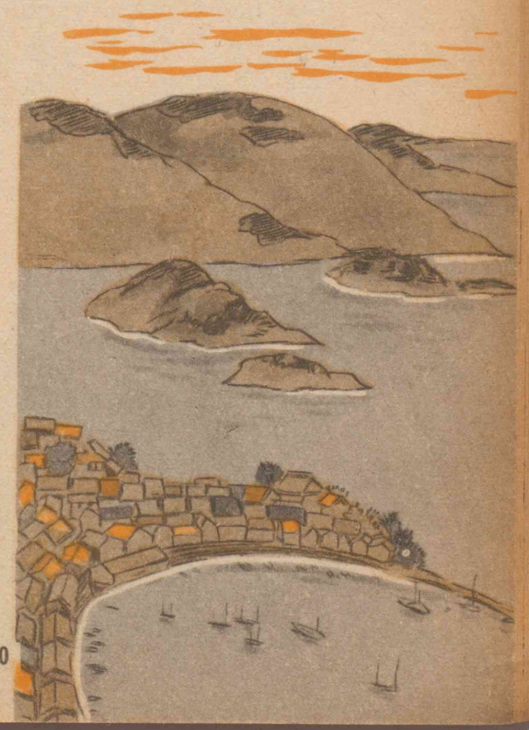
すから、おかねのこともしらべなければならないと思います。」
と、よしおはいいました。
「村の店では、どんな品物を売っているかを、しらべたいと思います。」
と、かず子がいいました。
「この間おかあさんと町に行ったとき、町の店と村の店とは、ずいぶんちがうと思いました。」
と、みち子はいいました。このあいだ先生からおききした、都会のデパートのお話を、みんなは思い出しました。
まさおは、
「ぼくはどうして店ができるようになったのか、考えているのです。」

といいました。はつえもよしおも考えてみましたが、よくわかりません。
「まさお君たちは、なにお考えているのですか。」
といって、先生がおいでになったので、まさおは今みんなと話しあったことを、先生におたずねいたしました。先生はにっこりされて、
「むずかしいことを考えているのですね。ではそれを学級のみなさんといっしょに、考えることにしましょう。」
と、いわれて話をつづけました。

「きのう、先生は学校からの帰りに、お家のお手つだいでおさかなを買ってきたまさお君と、町のつじであいましたね。おさかなをとる人は、毎日おさかなをとるために、海や川へ行くのでしょうが、その人はそのほかのことを、少しも考えていないのでしょうか。まさお君どうでしょう。」

先生にしつもんされて、まさおは、しばらく考えていましたが、立ちあがって、

「おさかなをとりに出るのは、そのおさかなを売って、自分の



ほしいと思う品物を手にいれるためです。」

と、いいました。先生はうなずいて、

「そうです。はじめ人はみな、自分のいりような品物は自分でつくったものです。けれどもそれではたいそうめんどうですから、近くの人で、自分がほしいと思う品物を持っていれば、たのんでそれと自分の持っている品物とこうかんして、用をたしたことでしょう。今の商ぎょうは、こういうところからはじまったのでしょう。」

「先生。」

といって、三郎が立ってしつもんしました。

「でも自分のほしいと思う物を、近くの人が持っていなければこまるでしょう。」

先生はそれにこたえました。

「そのとおりです。自分のほしい物を持っている人をさがしまわるのも、たいへんほねがおれることですし、またいつもその人のところに自分のほしい物がある、というわけでもないでしょう。そこで人々はくふうして、こうかんしたいと思う物を、めいめいが、日をきめてあるところに持ちよることにしました。この日には近くの人があちこちから集まって、品物を自分の前にならべたことでしょう。」

「あ、先生、それは市のことですね。」

と、はつえがいいました。まさおは、

「では先生、おとなりの町を五日市というのは、むかし五日に市がたったためですか。」

と、おたずねしました。先生は、

「それは五日の日だけではありません。まい月、五日、十五日、二十五日と五の日に市がたったといういみです。

今から千二百年ほどまえに、みやこのあった奈良では、東の市と西の市とがあって、にぎわったといいます。市の日には近くの人が集まり、めずらしい物をながめたり、いろいろかわったことを話しあったりすることができるので、その日をみんなたのしみに待っていました。今でもおまつりやえんにちには、みなさんはよろこんでお家の人と出かけるでしょう。

それから、かじやとかだいくとかいう仕事は、だれにでもできるというものではありませんから、はやくから職人として、その仕事だけをとくべつにするようになりました。

「先生、そういう仕事をたのむ人が、毎日あったのでしょうか。すきや、くわなどは、一どこしらえますとながく使えます。」

と、はつえは、くびをかしげながらおききしました。みんなもそうだというかおをしました。先生は、

「そのとおりです。ですからこのような人たちは、おなじところにすみついても、そんなに多くのしごとがあるわけであり

ませんから、しごとをもとめてたびからたびへとあるいたものです。またおなじ所でたくさんつくられる物を、まえにしいれておいて、それらをほしがる人の所に持って行ってやる人もできました。これが商人です。ですから、はじめは職人も商人も、いつもたびに出あるいていたものです。けれどもその人たちは、たびに出あるいているからといって、できのよくない物をつくったり、人に売りつけたりなどして、おかねさえもうければよいというような、わるいことはしなかったのです。たくさんの物を一どにきかいでつくるのではありませんから、自分のしごとにせきにんをもってあたり、いつも高い心のほこりをわすれなかったといわれています。そのうち町もでき、しごとも十分にあって、くらしがらくにたつ

ようになると、たびからたびへと出かけることは、ほねのおれることでしたから、いつのまにかおなじ所にすみついてしまい、店をかまえるようになったのです。」

まさおは、考えながら先生におききしました。

「昔は、物と物をこうかんしたといわれましたが、ぼくはおかねでさかなを買ってきたのです。先生、いつごろからこうなったのでしょうか。」

「それはなかなかよいしつもんです

ね。商ぎょうがさかんになってきたからなのです。商ぎょうがさかんになると、物をこうかんするのでは、ふべんでしょう。そこで人はかへい（おかねのこと）を考えたのです。これは小さいものですから、どこへでも持って行かれます。またおかねさえあれば、ほしいと思う物とすぐにとりかえられます。はじめは米やおり物などがそのかわりに使われていたのですが、おとなりの中国の人が、金ぞくでかへいをこしらえて使っていたのが、日本にもつたわってきたのです。奈良にみやこが

おかれたころ、はじめてどうのおかねが日本にもつくられました。けれども、そのごしばらくの間つくられなくなり、ひつようなだけは、中国から買い入れるようになりました。

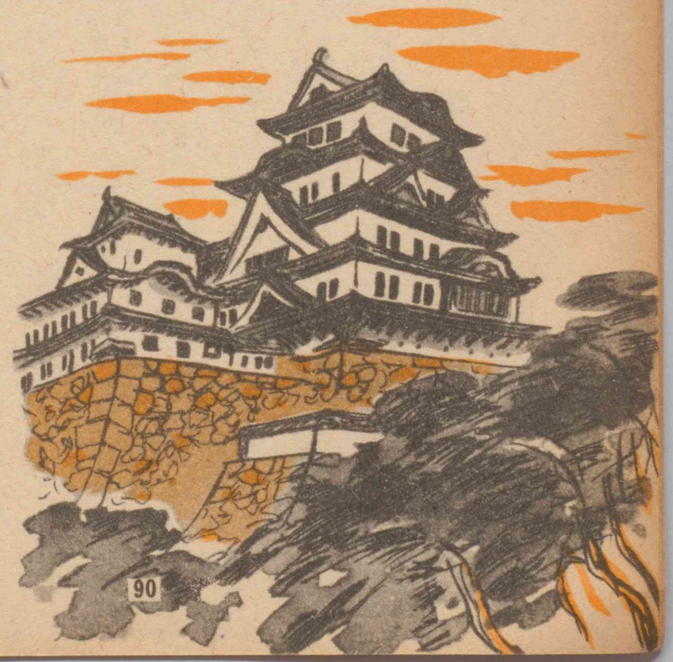
「先生、どうしてつくられなくなったのですか。おかねの方がずっとべんりだと思います。」

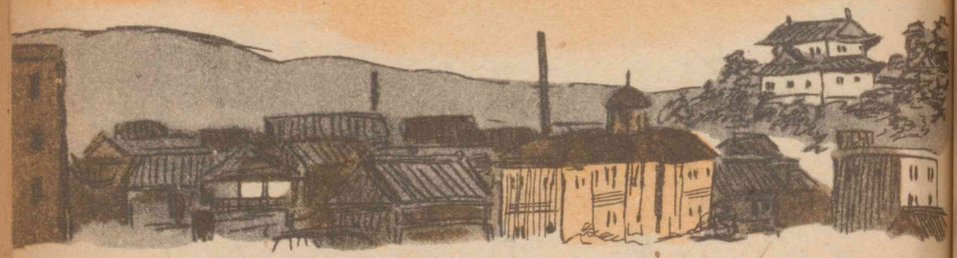
と、まさおが、ふしぎそうにたずねました。先生は、

「それは、まだ、商ぎょうや工ぎょうが、ほんとうにさかんではなかったからでしょう。ですから日本でもじょうか町ができはじめるころ、（四百年ばかりまえ）商ぎょうもさかんになり、大名も自分でかへいをつくるようになりました。さあこうなると、町はたいそうにぎやかになりました。じょうかにはけらいのぶしや、商人、職人などいろいろな人もすむよ

うになります。大名は町をさかえさせるために、商ぎょうがうまくできるように、いろいろめんどうを見たものです。また、たびの人には、かならずその町でとまらなければいけないと、めいじた大名もあります。町にごふく町、さかな町という名がついているのがあります。これはおなじような商人や職人をひとつの場所にあつめて、くらしやすいようにさせていた所なのです。」

と、おっしゃいました。すると、





「先生、おとなりの町にもかじ町とかだいく町とかいうのがあります。」

と、まさおがいいました。はつえは

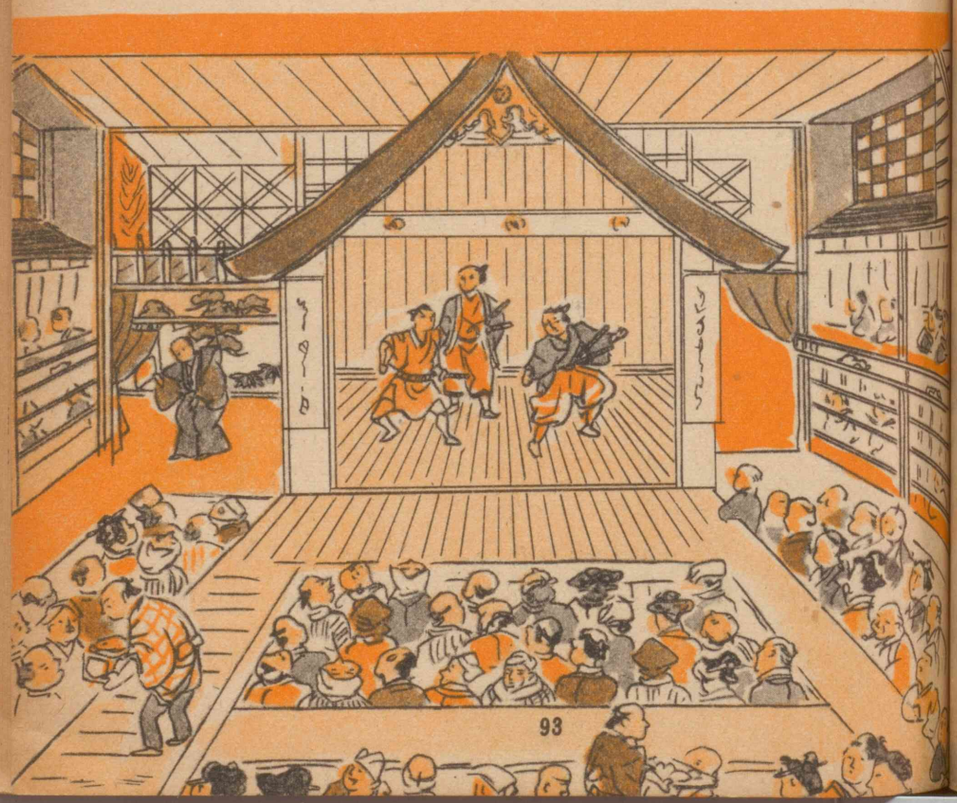
「むかしの市は、町の魚市場のようだったのでしょうか。」

と、たずねました。先生は、

「世の中がすすんで商人がふえてきたものですから、とくべつにある品物だけを集めて、商人にすぐにわたせるような、問屋だとか魚市場、青物市場などができてくるようになりました。そしてじょうか

町が、それぞれの地方の商ぎょうの中心となりました。国ぜんたいの中心は江戸と大阪で江戸は百万いじょうの人がすみ大阪は三十五万、京都は四十万といわれていました。三百年ばかりまえの大阪は、五千けんほどの問屋がならびたち、その家の白かべは、まるで雪のふった朝のようだったということです。大名が、自分のじょうかに商人をよびよせたものですから、こんな大きな都会ができたのです。江戸や大阪ではかぶきという町

人によろこばれるしばいなどもできました。それにひきかえ、のうみんは、その土地からはなれることを、かたくとめられていました。それはひゃくしょうが少なくなると作物がへり、町の人たちのくらしがこまるからです。村の人に自ちがゆるされていたように、町では、自ちがみとめられていま



したから、町人の中から、町名ぬしがえらばれ、町の人たちの世話をしていたのです。さあ、これで、むかしの物の売り買いについてわかったでしょう。ではいくつかのはんにわかれて、みなさんの問題をしらべることにしましょう。どういうふうにわかれたらよいか、みんなで考えましょう。」

と、おっしゃいました。

四　きかいの力

○とりいれ

よし子の家は朝からだっこくきのひびきでにぎやかです。

となりのおじさんやおばさんが集まって、よし子のおとうさんやおかあさんといっしょに、いそがしそうにはたらいています。いねのたばをはこんだり、それをほぐしたり、なれた手つきで、だっこくきにかけたり、もみをあつめたり、目のまわるようないそがしさです。けれども、だれもみんなおもしろそうに

話したり、わらったりしてはたらいています。
おおぜいの人が、いっしょうけんめいに力をあわせてはたらくので、しごとはおもしろいようにはかどります。
よし子は、いもうとのみつ子をおぶって、台所の方にまわってみました。台所では、おばあさんととなりのおねえさんが、おいもを大きなかまでふかしていました。
「みつ子は、おとなしくて、おりこうだね」。
と、おばあさんがいわれました。
しばらくすると、おねえさんが、
「おいももふけたようですから、おちゃにしてもらいましょう」。
といって、みんなのはたらいている方に行きました。やがて、今までやかましくひびいていただっこくきの音が、ぴたりとや

みました。よし子はみつ子をおかあさんにわたすと、おちゃといもをみんなのやすんでいるところにはこびました。
「みなさん、おつかれさまです。ずいぶんしごとがはかどりましたね」。
と、おばあさんがあいさつをされました。
「いやあ、むかしとちがって、動力だっこくきでいねこきをするのですから、らくになりましたよ」。
と、おとなりのおじさんがいわれました。
すると、それにあいずちをうって、

はつえのおとうさんが、

「まったくきかいの力というものは、ありがたいものだ。からだもあまりつかれないで、しごとがはかどるんだからね」

と、いわれました。

「十年ぐらいまえまでは、手まわしか、足ぶみでした。あの足ぶみのだっこくきを朝からばんまで使うと、足がぼうのようになりましたよ。それでもよくもみがとれないで、あとでうたなくてはならなかったのですから、てまもかかりましたよ」

と、よし子のおとうさんもいわれました。

「このきかいでやれば、もみもきれいにと

れて、足ぶみで六日かかるところを一日でやってしまうんだから、べんりになったものだよ」

と、いうおじさんもあります。

「もみすりきかいにしても、そうだね。しごとがはかどる上に、米にきずがつかないんだからね」

「まあ、なんといっても、むかしは、たいへんだった。いねこきにしても、むぎこきにしても、手でこくか、千ばいねこきを使うよりしかたがなかったんだからね」

すると、おばあさんが、

「わたしの子どもの時は、千ばいねこきばかりでした。だから いねこきでも、もみすりでもたいへんなしごとで、ひゃくしょうには、ひまというものがありませんでしたよ」。

と、いわれました。

「世の中は、すすんだものですね。これも、たくさんの人がわたしたちのくらしをたのしく、べんりにしようと ほねをおってくれたおかげですね。この動力だっこくき一つ考えてみても、発明した人のくしんは、たいへんなものだったでしょう。それから、発明をするためにひつような材りょうや、どうぐや、きかいをつくってくれた人たちのほねおりも、たいへんだったことを忘れてはいけませんね」。

と、よし子のおとうさんがいわれました。

話に花がさいて、むかしの思い出話が出ました。そして、きかいができたために、時をむだにしなくなったことが話されました。

よし子は、みんなの話

発明発見年表

ことがら	生国	なまえ	西暦
浮力の原理	ギリシャ	アルキメデス	紀元前三世紀
地動説	ポーランド	コペルニクス	1502
望遠鏡	イタリー	ガリレオ	1619
蒸気機関	イギリス	ワット	1765
ダイナマイト	スエーデン	ノーベル	1867
映画	アメリカ	エジソン	1891
無線電信	イタリー	マルコニー	1896
ラジウム	フランス	キューリー	1898
飛行機	アメリカ	ライト兄弟	1903
ペニシリン	イギリス	フレミング	1929

をきいて、今のようなべんりな世の中になるまでに、おおぜいの人がどれだけほねをおったかということを、もっとくわしく知りたいと思いました。

やがて、また、仕事がはじまりました。だっこくきは、ものすごいうなり声をあげて、いねのほをはらっていきます。

いもうとのみつ子が、ひるねをしているので、よし子は、わらをまとめる仕事を手つだっていました。

そこへ、まさおがきました。よし子のはたらいているのを見ると、

「ぼくも、お手つだいをしよう。」

といって、わらをたばねはじめました。

よし子が、

「このわらは、きかいでなわにするのよ。」

と、いいました。

「よし子さんの家には、なわをなうきかいがあるからべんりだね。」

と、まさおがいいました。

二人が一しょうけんめいに手つだっていると、みつ子が目をさましたらしく、おもやの方でなき声がしました。よし子は、おもやの方にいそいで行きました。

「よし子も、まさおさんも、少しおやすみなさい。」

と、よし子のおかあさんがいわれましたので、まさおも仕事をやめて、おもやのえんがわにこしをおろしました。えんがわの近くにうさぎばこがおいてあります。こんど、よし子が学校に持って行くことになっているうさぎが、秋の日ざしをあびてのんびりと草を食べていました。

「まさおさん、わたし、あののうぐしらべの勉強ね。こんなえにかいてみたのよ。」

といって、よし子が、一まいの大きな紙をひろげました。その紙には、くわ、かま、すき、からすきなど、いろいろなのうぐのえが、かいてありました。

「やあ、ずいぶんよくしらべたね。」と、まさおが感心しました。まさおは、しばらく見ていました。が、

「これは、なにに使うの。」

といって、きかいのえを指さしました。

「これは、吉田さんのところにあるこううんきで、こちらは草とりきかいよ。近ごろはあぶらがあまり手にはいらないので、時々しか使っていないけれど、とてもべんりなきかいだそうです。土地のひろい外国では、畑をたがやすにも、たねをまくにも、とりいれをするにも、大きなき

かいを使っているそうです。けれども土地のせまい日本にあうように、くふうしてつくったのが、このきかいなのです。

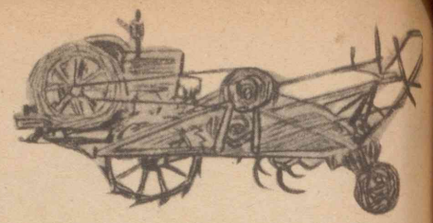
『このこううんきでたがやすと、人手もかからずに、土がずいぶんこまかくたがやされる』。と、吉田さんのおじさんが話しておられたわ。

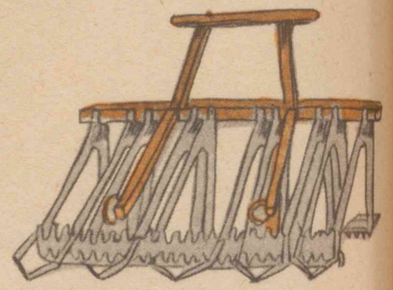
「ずいぶんべんりなものがあるんだね。北海道で使っているきかいというのも、これとおなじかな」。

「北海道は土地がひろいので、もっと大きなきかいがつかわれているのですって」。

「このきかいは、どろぶかい田では使えないだろうな」。

「田をたがやすこううんきが発明されて、使っているところがあるそうよ」。



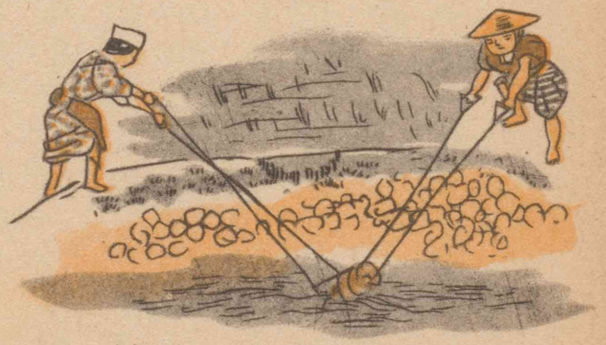


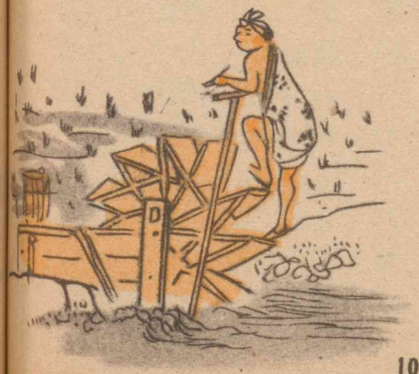
まさおはますます感心して、

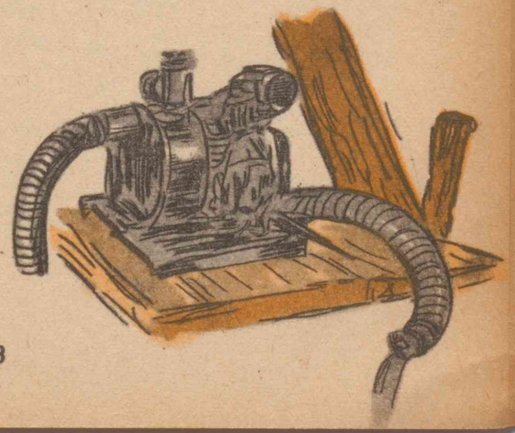
「今までは、人や牛や馬の力でのうぎょうをしていたけれど、これからはだんだんときかいの力が使われるようになるんだね。ひでりがつづいた時、田に水をひくのも、このごろはポンプを使うようになったものね。むかしの人がこまっていたことも、近ごろのきかいを使うと、なんでもなくなってしまうんだからなあ」。

と、いいました。

まさおはよし子のえを
みて、心の中で、
「よし、ぼくもよし子さ
んにまけないのうぐし
らべをしよう。」
と、思いました。







○せい材所

きょうは、うさぎばこをつくる日です。まさおたちは木のはこを持って、工作室に集まりました。

先生が、どうぐばこにはいっているいろいろな工作どうぐをかしてくださいましたので、はんごとに、めいめいのしごとの受け持ちをそうだんしました。

それぞれの人の受け持ちがきまると、さっそくしごとにかかりました。

まどから、つよい日がさしこんで、仕事にむちゅうになっている人たちのひたいには、あせがにじんでいます。

よしおは、いたをのこぎりで切っていましたが、なかなかうまくいかないようです。

「どうも、うまく切れないなあ。こののこぎりは、だめなんだよ」。

と、よしおがいいました。

「よしお君、君は、いたをたてにひくのに、よこびきを使うんだもの、切れないわけだよ」。

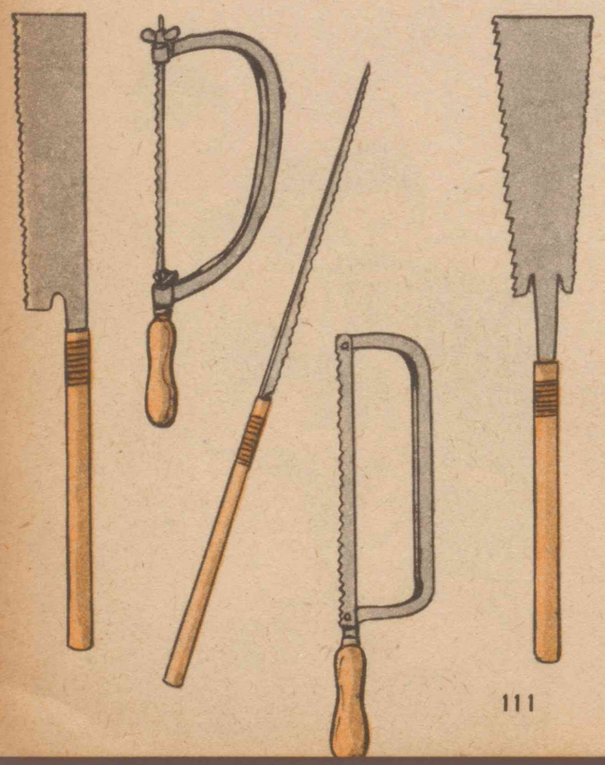
と、まさおが、よしおののこぎりを見ていいました。

「ああ、そうか。ぼく、知らなかったよ。でも、さとる君が竹を切っているのこぎりは、よく切れそうだなあ」。

「これは、竹を切るのこぎりだよ。竹はよく切れるけれども、いたはこんなにうまく切れないよ」。

と、さとるが、いいました。いつのまにか、先生がそばにいらっしゃって、三人の話をきいておられました。

「よしお君、どうぐには、いろいろな使いみちがあるのですよ。どのどうぐもそれぞれわけがあって、生まれてきたのですから、



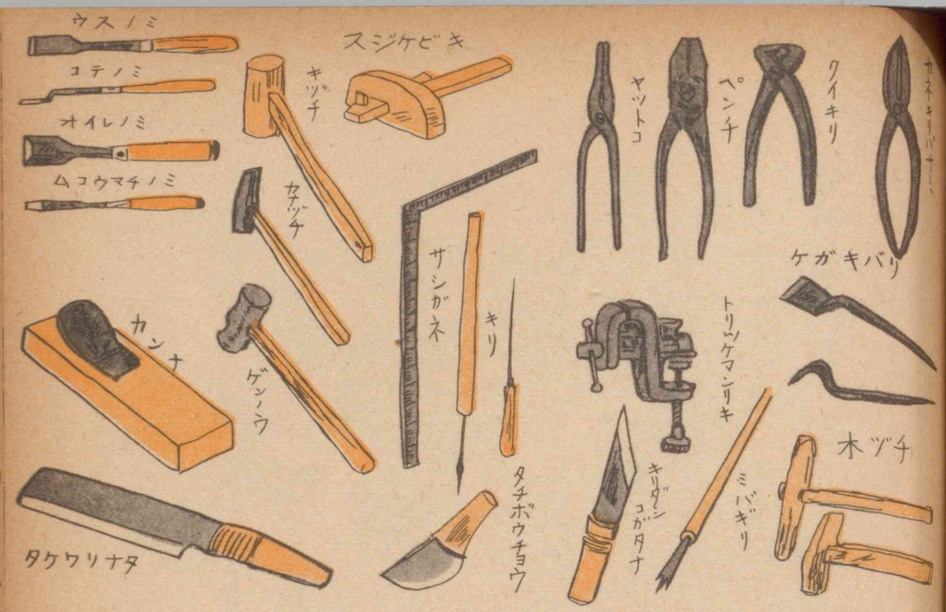
よくその使いみちを知って、使うのでなければ、りっぱな仕事ができないわけです」。

と、先生は、おっしゃいました。

よしおは、どうしてこんなにたくさんのどうぐができたのか、いつごろから使われるようになったのか、知りたいと思いました。

どのはんも力をあわせて、いっしょうけんめいに仕事をすすめたので、やがて、りっぱなうさぎばこができあがりました。

みんなは、うれしそうにうさぎばこをながめました。



あとかたずけがおわってから、先生はつぎのようにたずねられました。

「どのはんもしっかりしたうさぎばこができあがりましたが、どうして、このようにうまくできたのでしょう」。

「みんなが、力をあわせたからです」。

と、さとるがいいました。

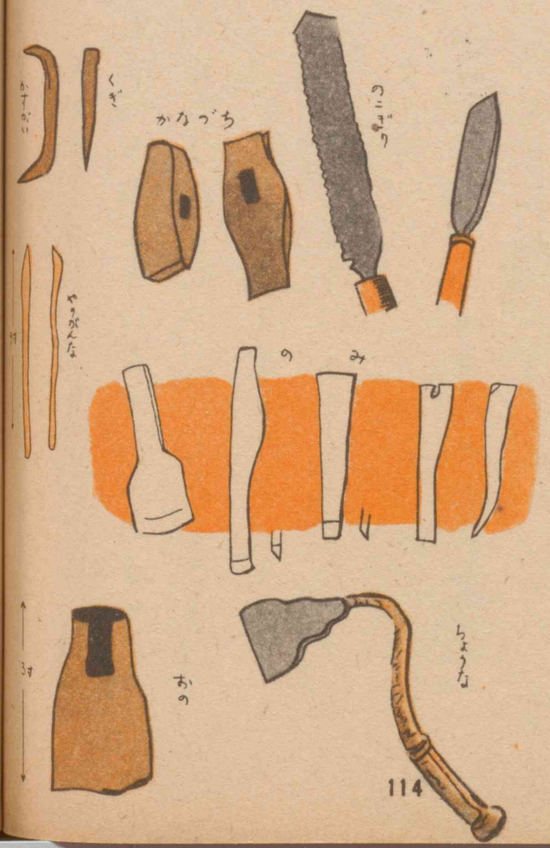
「いろいろな工作どうぐが使えたからです」。

と、まさおがいいました。

先生は、いちいちうなずいてきい

ておられましたが、やがて、つぎのような話をなさいました。

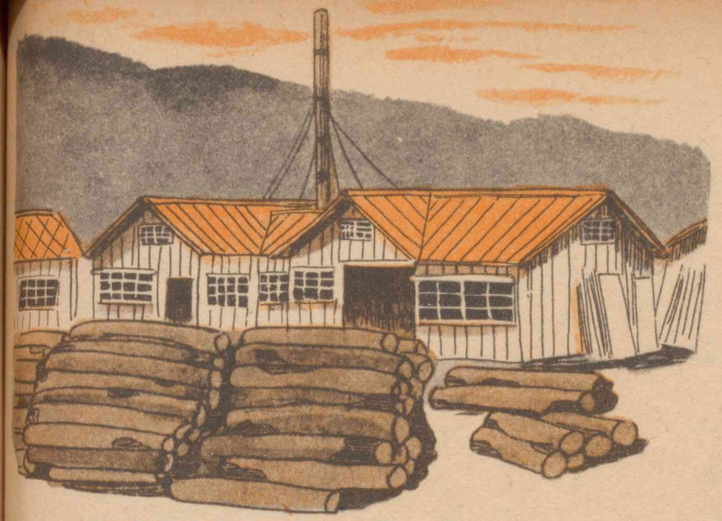
「今の世の中は、なにをするにしても多くのどうぐがありますから、わりあいかんたんにできます。ところが、むかしはそうではなかったようです。さっき、よしお君が、たてびきののこぎりがあるのに、よこびきののこぎりを使って、こまっていましたが、たてびきののこぎりが発明されたのは、今から四百年ぐらいまえの



ことです。それまでは、ふとい材木をたてに切るのには、まずのみをさいづちでたたきこんで、たくさんのあなをあけ、くさびのやくめをする「や」というものを入れてわりました。よく目の通った、しつのよい材木なら、そんなやりかたでもわれたでしょうが、ずいぶん木がむだになりましたし、たいへんほねもおれました。このふべんをなくすために考えられたのが、たてびきののこぎりです。また、今使われている台がんなも、たてびきのこぎりとおなじころに発明されたものです。」

「むかしの人は、たいへんだったのですね」。
と、はつえがいいました。先生は、さらに話をつづけられました。
「このようにして、べんりなどうぐが、つぎからつぎへと発明されたり、また、外国からつたわったりして、いまのようにたくさんのどうぐができたのです。
ことに明治になって、外国とのゆききがさかんになると、いろいろなどうぐが、日本で使われるようになりました。それから、大正、昭和になると、どうぐがだんだんきかいにかわってきました。きか

いのこぎり、きかいがんななど、見たことがあるでしょう。きかいのこぎりは、せい材所などで使われていますからね。
「きかいのこぎりって、どのようにして木を切るのですか。せい材所に行ってみたいなあ」。
と、よしおがいいました。みんなも、「行ってみたい」とか、「行ってみよう」とか話しあっています。
すると、先生が、
「それでは、近いうちにせい材所を見に行きましょう」。
と、おっしゃいました。



せい材所を見に行く日がきました。空はすっきりとはれわたっています。だらだらざかになっているひろい道を通って、せい材所についた時は、みんなのからだは、あせばんでいました。

せい材所の近くには、原木が山のようにつんであります。せい材所の中からは、ひっきりなしに、ジー、ジー、ジャー、という音がきこえてきます。

じむ所に先生がはいって行かれて、

しばらくすると、せい材所のおじさんといっしょに出てこられました。おじさんは、にこにこしながら、

「やあ、ごくろうさま。よく見て行ってくださいよ。なにかわからないことがあったら、あとできいてください。」

と、いわれました。

せい材所の中では、二台の大きな丸のこと一台のおびのことが、電気の力で動いています。丸のこは、目にもとまらない早さで、白く光りながらまわっています。丸のこを間にして、二人のおじさんがむかいあい、ふとい原木をトロッコのような車に乗せて、てまえのおじさんが、丸のこに木のはしをあてます。「ジャー」という音がして、みるみるうちに木のはしが切られます。それをゆっくり通して行くと、むこうのおじさんが受け

とり、すっかりはしが切りとられてしまいました。きかいの横にいたおじさんが、それをむこうにはさんで、なんかいかおなじようにして木のはしが切りとられたかと思うと、りっぱなかく材になってしまいました。

「すごいなあ。」

とみんなは、感心して見ています。ちょっと見ている間に、丸のこと、おびのこで、かく材やいた材がどんどんつくら

れていきました。

はつえは、いつか、家でこびきさんにたのんで、木をひいてもらった時のことを思い出しました。ゆっくりしたちょうしで、大きなのこぎりをまえやうしろに動かしますが、ほんの少ししか切れません。しばらくするとのこぎりの目たてをします。また、ひきはじめます。こんなしかたですから、二本の木をひくのに、

三日もかかりました。

目の前のきかいは、みるみるうちに原木を思うように、いた材や、かく材にしていきます。その時、原木をつんだトラックが、せい材所の前にとまりました。せい材所のおじさんが、みんなの所にきて、

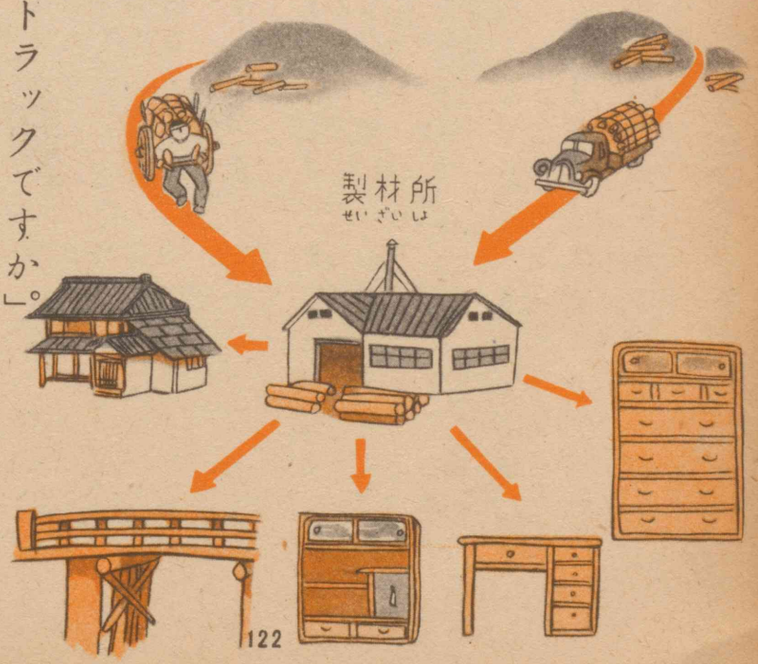
「また山から原木がきました。」

と、いいました。すると、よしおが

「山から原木をはこぶのは、いつもトラックですか。」

と、たずねました。

「いや、トラックだけとはかぎりません。牛車や、馬車でもは



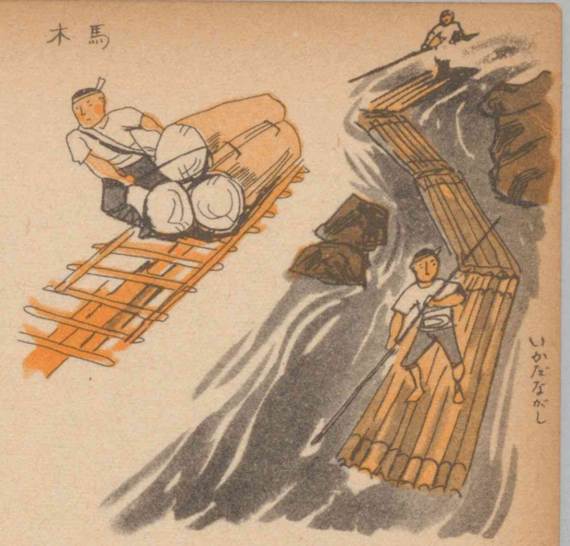
こびます。」

と、こたえられました。

「おじさん、でも、トラックや、荷馬車は木をきりたおした山おくから、すぐはこぶわけにはいかないと思いますが、トラックや、荷馬車で、はこべる場所までは、なんではこぶのですか。」

と、こんどは、よし子がたずねました。

「きりたおした木は、ふつう、山で二か月か三か月ぐらい、よくかわかします。それから、使いみちにしたがって、長さをきめてはこびやすいように切ります。トラックや、荷馬車の行ける所までのはこびかたには、いかだながしや、川の水をせきとめて、水がいっぱいになったころをみはからって、せ



きを切り、材木をおしながすしかたがあります。また、人がかついだり、ひっぱったりするしかた、材木のすべり道をつくって、すべりおとすやりかた、木馬に材木をつんでひきおろすやりかたなど、むかしも今もやっています。けれども、今は、鉄のつなをはって、山から材木をつなわたりさせてはこんだり、雪の多い時などは、トラクターにそりをつけたりしてはこびます。また、大きい山になると、材木をはこぶ鉄道がとくべつしかれている所もあります。」

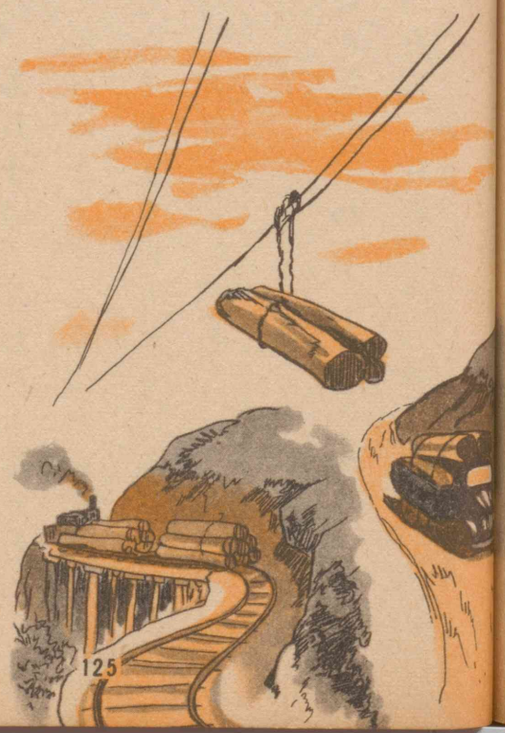
おじさんの話がおわると、かず子が、

「そんなに大がかりに、木を切ってしまったら、はげ山になってしまいませんか。」

と、たずねました。

「それは、だいじょうぶです。木を切る一方、なえ木をうえてそだてることもさかんにやっていますから。あまり、木を切りすぎて、大水になるとたいへんですからね。」

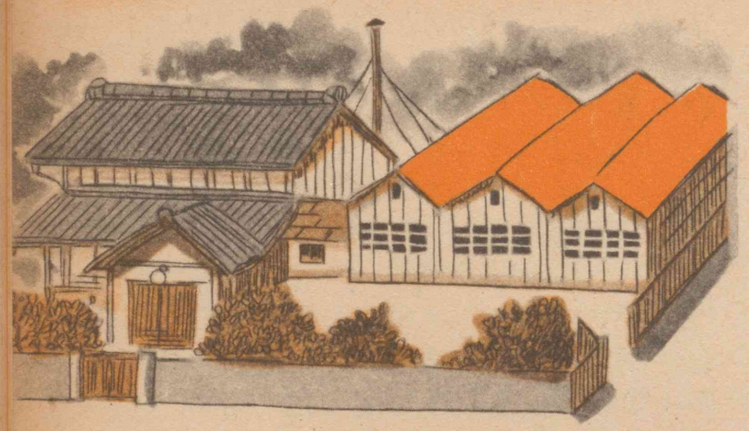
と、おじさんはおっしゃいました。



○おり物工場

りっぱにうさぎばこができあがったので、そのつぎは、かず子の意見で、みんなが家でなにかくふうしたものをつくって、学校に持ってくることにしました。みち子は、これからだんだん寒くなりますから、教室のこしかけのざぶとんをつくろうと思いました。おかあさんから、したてあまりのきれをいろいろもらって、きれいなざぶとんをぬいあげました。そこへ、おとなりのかず子さんがあそびにきました。

「みち子さんもざぶとんをこしらえたの、わたしもそう思って、さっきおかあさんからきれをいただいたの。けい子さんはなにをこしらえてくるかしら。けい子さんのお家はおりもの工



場だから、きっとよいきれがあるわね。」

といいました。みち子は、

「ふたりで見に行きましょうか。わたしはまだ、どうやってきものがおられるのか、見たことがないから、工場の中を見せてもらいましょうよ。」

といって、ふたりで出かけました。

「ふたりともよくきましたね。さあ、おあがりなさい。けい子、お友だちがいらっしゃったよ。」

と、けい子のおとうさんは、えがおでむかえてくださいました。

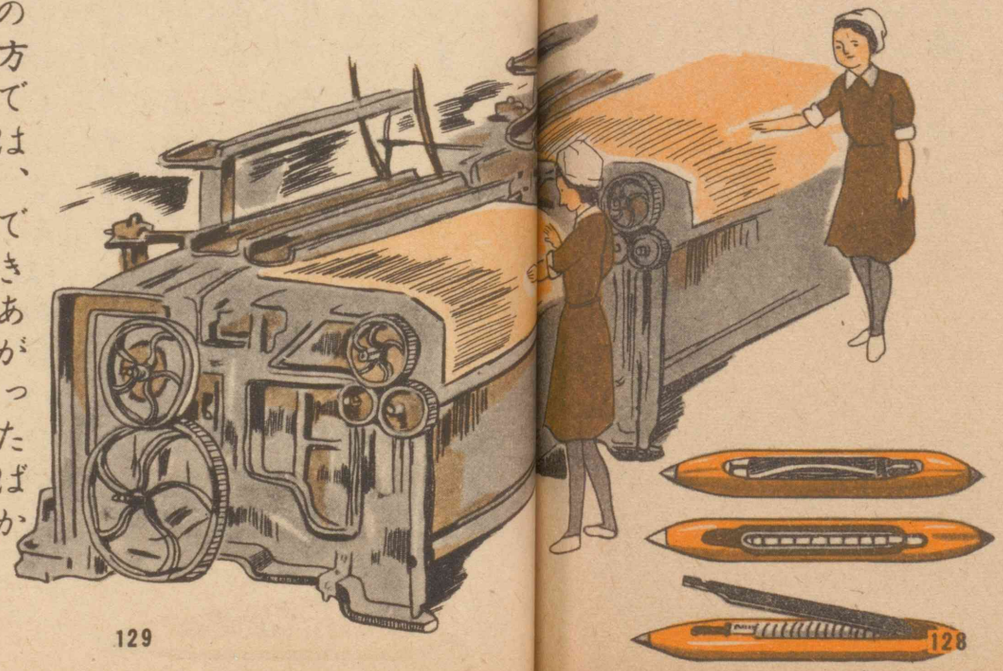
さっそくおねがいして、工場を見せてもらうことにしました。

じむ所のおくからは、ガタンガタンとはたおりきかいの音が強く耳にひびいてきます。頭に白いぼうしをかぶったおりこさんのすがたも見えます。けい子のおとうさんにあんないされて、ふたりは工場の中へはいりました。糸のにおいがはなをつきます。白い糸をつけたおさが、右に左にと、はたおりきかいの中を早く動いています。

たて糸がまるでくしですいたように、きれいに一列にならんでいて、おさが動くたびに少しずつ下におりてきます。はたらいているおりこさんは、ひとりで二台も三台ものはたおりきかいを受け持ち、ちゅう意深く見まもっていて、たて糸が切れると、すばやくつなぎます。むこうの方では、できあがったばかりのおり物をひろげて、きずをしらべている人がいます。きかいのうんてんする音で、ことばもよくきこえないほどです。

「さあ、おかけなさい。」

じむ所にもどったふたりは、いすにこしかけて、けい子と三



人で、けい子のおとうさんの話をきくことにしました。みち子がたずねました。

「できあがったおり物は、みな白い色なのですね。」

けい子のおとうさんはわらいながら

「これはおりやすいように糸にのりをつけてあるのです。のりをおとして色をそめますと、みどり屋ごふく店で売っているようなきものになるのです。」

と、いいました。つぎに、

「おじさんの所では、なにをおっている

のですか。」

と、かず子がたずねました。

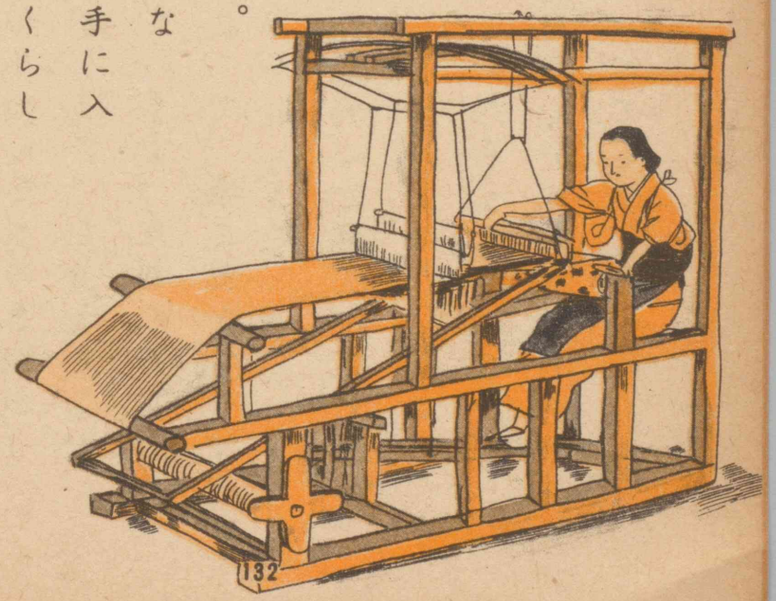
「うちでおっているのは、めいせんやちりめんなどのきぬおり物です。きぬおり物は上等なものになるほど、もようもこまかくなりますから、気をつけておっています。京都の西じんおりなどになると、おさをきかいでなくて、手で動かします。」

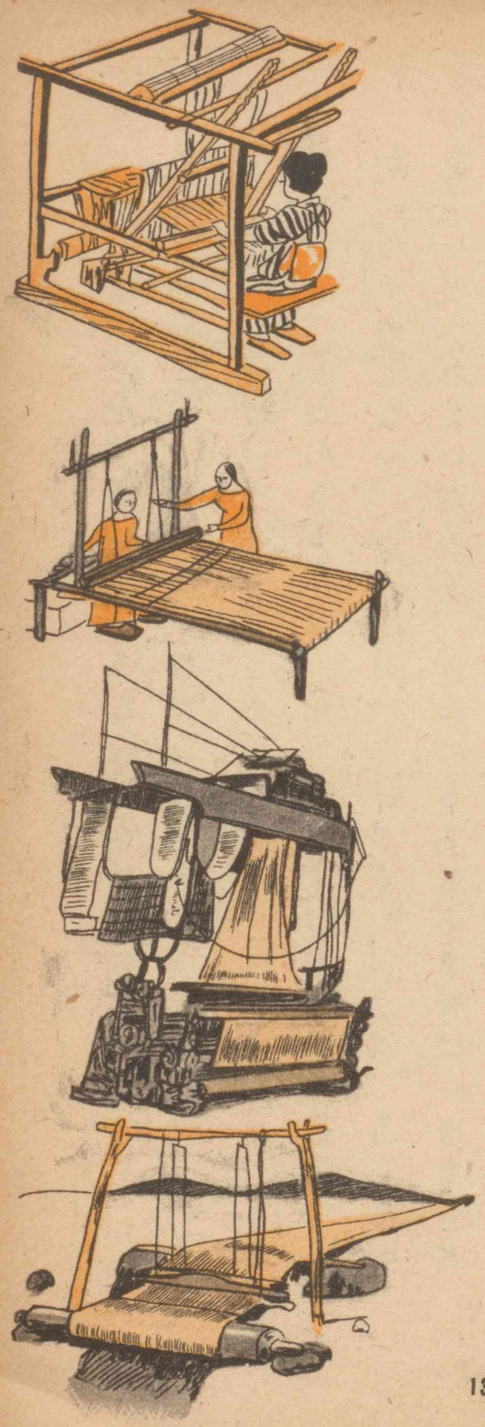
こんどは、みち子がたずねました。

「いつごろから、りっぱなきかいを使うようになったのですか。」

「そうね。うちのおばあさんがわかいころには、まだ、そこらにあるような手おりのきかいを使っていたそうです。むかしは、自分の家できるきものは、みな女の人がおったのですから、そのくふうはたいへんなものだっただでしょう。はたおり

きかいができ、電気の力でうん
てんするようになってからは、
もめんですと、手ばたの時の二
百ばいいじょうも多くおれるよ
うになったといいます。そこで、
工場もでき、たくさんのきもの
をおって売りだすようになりました。
このために、むかしの女の人のような
くろうがなくなり、よい品をやすく手に入
れられるので、むかしにくらべて、くらし
もずっとべんりになりました。
と、けい子のおとうさんがこたえました。





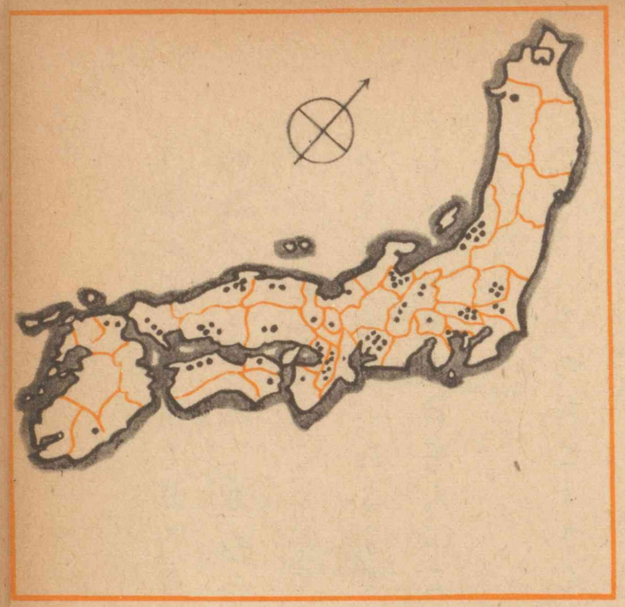
「わたしはね。ざぶとんをこしらえる時、おかあさんからきぬ
のきれをいただいたのよ。つやもはだざわりもいいのでうれ
しかったわ。」

と、みち子が、かず子にいいました。かず子は、

「きぬのざぶとんはぜいたくね。」

といったので、けい子のおとうさんはわらいながら、

「むかしは、きぬのきものは、みぶんのよい人だけがきました。かいこをやしない、きぬをおったひゃくしょうは、みぶんがひくいとされていたので、きぬのきものをきてはいけないとめられていたものです。むかしのとのさまは、人々のくらしがぜいたくになることを心配して、町人やけらいのぶしたちにも、もめんをきるようにねっしんにすすめたのですが、きぬのつやの美しいところから、それでもなお、きものののうらや、したぎを、きぬにしていました。そうやって、きぬが人によろこばれ、よく売れたものですから、自分の国をゆた



かにするために、ひゃくしょうやぶしのないしょくに、きぬおりものをおることを、ねっしんにすすめたとのさまがあります。米沢おりや、長浜ちりめんなどは、こうしておこったのです。」

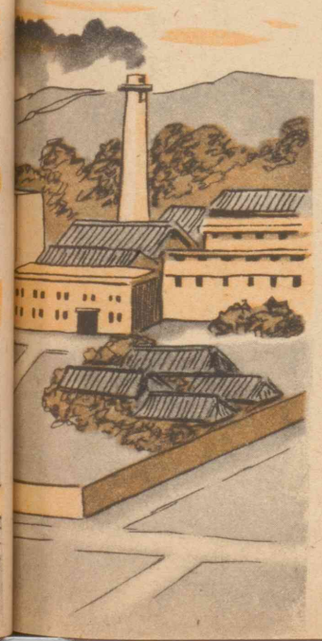
と、いいました。かず子は、

「それでは、むかしの人のきものは、もめんやきぬだったのですか。」

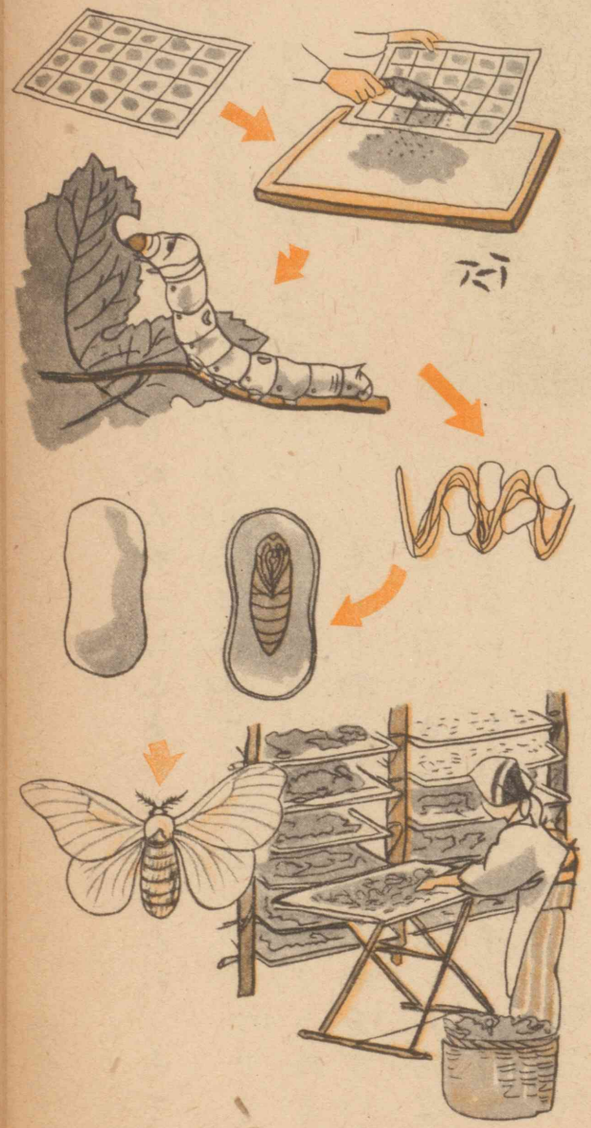
と、たずねました。けい子のおとうさんは、

「もめんのきものをきるようになったのはそうむかしのことではあ

りません。今から三百年ほどまえから、国ぜんたいにひろく
わたがうえられ、もめんのきものをきるようになったのです。
ずっとむかしは、ふじずるのかわでぬのをおったり、あさの
きものをきていたようです。もめんがふだんぎとして、どう
してきゅうに日本人にこのまれるようになったか、考えてご
らんなさい。」
と、けい子のおとうさんがいいました。三人は考えてみまし
たが、よくわかりません。みち子が、
「もめんのきものは、からだにや
わらかく感じるからでしょう。」
といいました。けい子のおとうさ
んは、



「そうです。それに色やもようが
きぬのようによくでて、きぬよ
りもやすいということからでしょ
う。」
と、いいました。



「そうね。したぎには、もめんが一ばんあたたかいわね。毛では、チクチクして、はだがいたくてね」。

と、かず子がいいました。けい子のおとうさんは、

「毛おり物のしたぎはあせをすいとらないから、えいせいにもよくないでしょう。日本の人のものははたらきやすいようふくへと、だんだんかわってきましたが、きぬをようふくのきじにするには、ぐあいがわるいのです。今ではこのことが一ばんこまることだと思います。それにナイロンというか学の力でつくったおり物ができたので、いぜんのようにアメリカへたくさん、ゆ出できなくなりました。これからの日本のおり物は、きぬにばかりたよらないで、か学の力でつくったおり物とか、毛おり物、めんおり物をさかんにしなければならないと思います」。

と、いいました。ふたりが、けい子のおとうさんにおくられて外に出た時は、さっきのやかましいきかいの音は、すっかりやんでいました。

五　たのしいくらし

○　明かるいへや

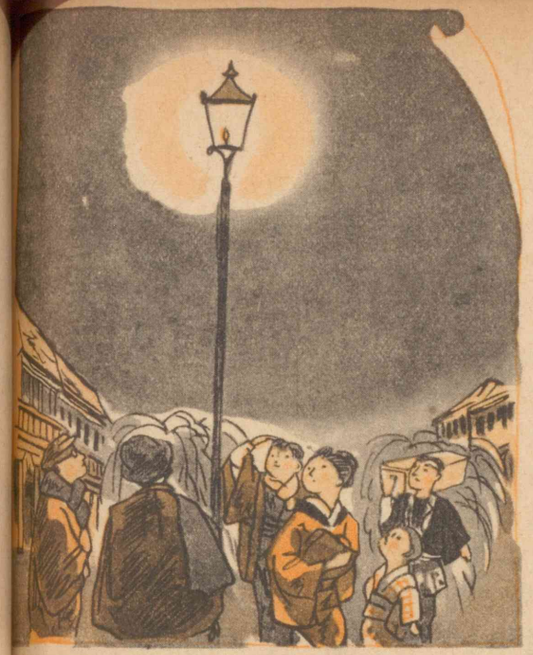
たのしいタはんのあとのひと時をすごしたまさおは、学校で勉強している発明発見の話をしらべようと思って、自分のへやのスタンドのスイッチをひねりました。

まさおくんは、「おや。」と思いました。へやの中は、目もさめるように明かるく、いつもの電きゅうの光とちがって、少し青みをおびているように思われます。まさお君は、おどろいておとうさんの所へきました。

「ああ、スタンドの電きゅうのことかね。あれは、晝光燈といって、日の光にちかいあかりを出す電きゅうだよ。ふつうの電きゅうのあかりは、赤みがかったき色で、日の光とは、ちがうから、日の光にちかい光をださせるために、ガラスにくふうしたものなのだよ。昼光燈は勉強するのに目がつかれないどいうから、帰りに買ってきて、とりかえておいたのだよ。通りのごふく屋や、そめもの屋でも使っているだろう。」

と、おとうさんがいいました。その時、しんぶんを読んでいたおじ

いさんが、めがねをはずして、
「考えてみると、世の中はずいぶんすすんだものだ。おじいさんが、まだ子どもだったころは、ランプを使ったものだ。そのころ、東京にはじめてついたガスとうを、村長さんが見てきて、こんな明かるいものがといって、ずいぶんおどろいたそうだよ。」
と、おっしゃいました。
「ガスとうとはどういうものですか。」
と、妹のかよ子さんがたずねました。



「むかし、まだ電とうが発明されなかった時、石炭からとったガスに火をともして、明かるくしたのだよ。」
と、おとうさんがおっしゃいました。おばあさんが、その時、
「むかしは、へやのあかりはあんどんだったのですよ。それから、ランプになったのです。わたしのおかあさんが子どもの時、はじめて、家にランプをつけたら、ずいぶん明かるいといって、みんなが大よろこびをしたと、話していらっしゃったよ。ろうそくはね、ちょうちんや、ぼんぼりにつかったのですよ。」
と、おっしゃいました。まさおはへやに帰ってつくえにむかうと、二宮金次郎が夜も勉強するために、自分で畑に菜たねをまいて、あぶらをとった話を思い出しました。そして、明かるい

へやで勉強できるのは、たいへんありがたいことだと思いました。

あくる日、学校に行って、きのう家できいたことを先生にお話しますと、先生は、まさおのはんはとおっしゃいました。

でんとうの発明についてしらべるように、先生は、

「きょうは、むかしの人はどうやって、火をおこして使ったか

ということを、お話しましょう」。

といって、

「人間が、ほかのどうぶつとちがうのは、人間が火を使うことを知っているからだといいます。はじめは、かみなりが落ちたり、山火事などで、しぜんにもえだした火を、うまく使ったのだろうといいます。そのうちに、かたいものをぶつけあったり、はげしくこすりあわせると、火が出ることを知って、火を自分で

ほしい時におこすことを知りました。やわらかい木にくぼみをこしらえておいて、それにかたい木のぼうをあてて、両方の手のひらできりのようにつよくもむと火がおきます。ひの木がよく使われたらしく、火を出す木だから、ひの木という名がついたのだといいます」。

と、おっしゃいました。そこで、としおは、先生にしつもんしました。

「火うち石というのも、火を出す石ということなのですか」。

「そうです」。

と、先生はいわれました。みち子はつぎに、

「それでは火をおこすのにずいぶんほねがおれたでしょう」。

と、いいました。先生は、

「そうです。では、みんなでやってみましょう」。

といって、いたと、ひの木のぼうを持ってこられました。

まさおは、まっかになってぼうをもんでみましたが、やっと先の方が少し黒くなっただけです。先生も同じようにおやりになりましたが、ちょっとけむりが出ただけでした。そこで、先生は、

「これでは大そう力がいるし、いそいで火がほしい時には、こまりますね。ですから、むかしはいろりの火をたやさぬようにすることが、女の人の大きなつとめだったのです。マッチ

が、百年ほどまえに発明されてからは、女の人のしごとも一つらくになったわけです。」

と、おっしゃいました。このつぎはまさおたちのはんに、しらべてきたことを、教室で発表してもらいます、とおっしゃいました。

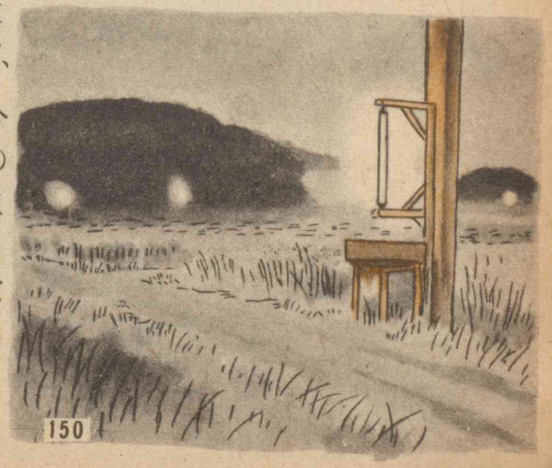
きょうは、まさおたちの発表の日です。まさおは電きゅうを大きくずにかいて、教室に持ってきて、せつめいをはじめました。

「電とうは、アメリカのエジソンが発明したのですが、電気は、エジソンよりも、もっとまえから考えられていました。エジソンはその電気をうまく使って、あかりをつけようとしたの

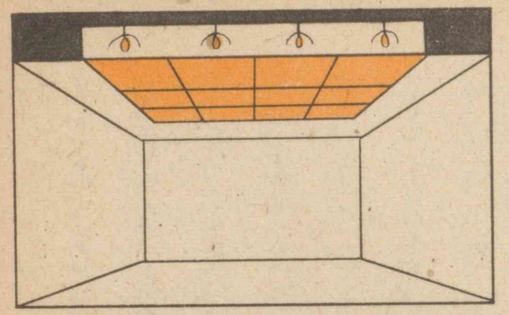
です。ガスとうではまだくらいし、アークとうではとりあつかいにふべんでしたから、エジソンはいっしょうけんめいでした。電きゅうの中の線は、高いねつがくわえられてもとけずに、いつまでも長持ちしなくてはいけません。またその線のねだんが高くては、ひろく世の中の人が使って、べんりな明かるいくらしをするわけにいきません。エジソンは、このためずいぶんくろうしました。千六百しゅる

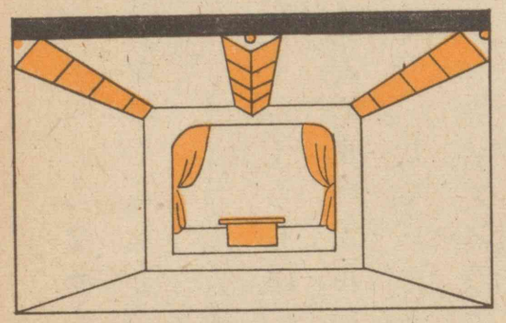
いほどの材りょうを集めて、なん百回、なん千回とためしてみてからやっと、日本の竹でつくったたんそ線が、一ばんよいことを知ったのでした。エジソンは、それだけで、よろこんで仕事をやめてしまわず、もっともっとくふうして、今のような電きゅうができるようになったのです。」と、いいました。つぎには、おなじはんのたけしが立ちあがりました。

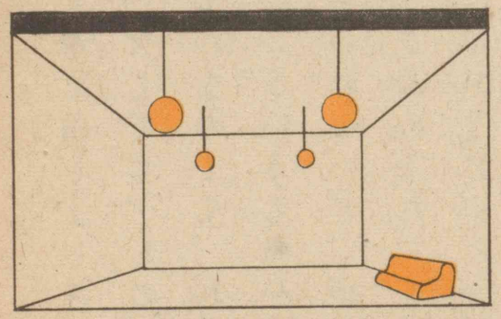
「エジソンが、電きゅうを発明する一年ほどまえに、イギリスのスワンという

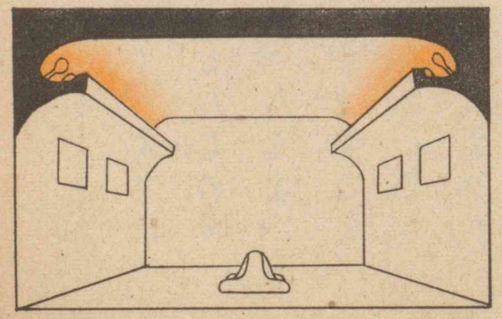


へやのしょうめいのしかた









人が、そのくふうをしていました。けれども、スワンは、自分のけんきゅう室だけを明かるくしただけで、ひろく世の中の人に使ってもらって、よろこんでもらうということには気がつきませんでした。エジソンは、かつどうしゃしんや、ち

くおんきなど、いろいろな物を考え出しました。しかしそれはみんな、世の中のくらしを、少しでも、たのしくべんりにしようと思って、くふうしたものなのです。わたしたちの今のべんりなたのしいくらしは、こういうものがあったらよいという、たくさんの世の人たちのねがいと、世の中をすこしでもすみよいものにして、たくさんの人たちによろこんでもらいたいという、エジソンのほねおりとがいっしょになって、だんだんとできあがってきたのだと思います」。

と、いいました。先生は、ふたりのはっぴょうは大そうよくできているといって、よろこんでくださいました。そして、みんなの方にむかって、

「わたしたちのくらしは、むかしの人たちにくらべると、ずい

ぶんべんりになっていますが、それをもっとべんりにするには、むかしの人がくふうし、発明してくれたものをありがたく思って、つかうだけではいけません。わたしたちは、それいじょうに、よいりっぱな物にしようとつとめ、さらにむかしの人が気ずかなかったよい使いかたが、もっとほかにあるにちがいないと考えることも、大切だと思います」。

とおっしゃって、さかなをひと所に集めてとる、集魚とうの話をしてくださいました。

○ねんりょう

教室のまどから見える遠くの山は雪でまっ白です。運動場の木も葉がすっかり落ちて寒そうです。教室の火ばちにかけたやかんからは、白いゆげがあがっています。みんなはそのまわりに集まって、けさの寒さを話しています。

「学校のよこの小川など、けさ、うす氷がはっていたよ。手ぶくろをしていても、指はかじかんでしま

うものね。」

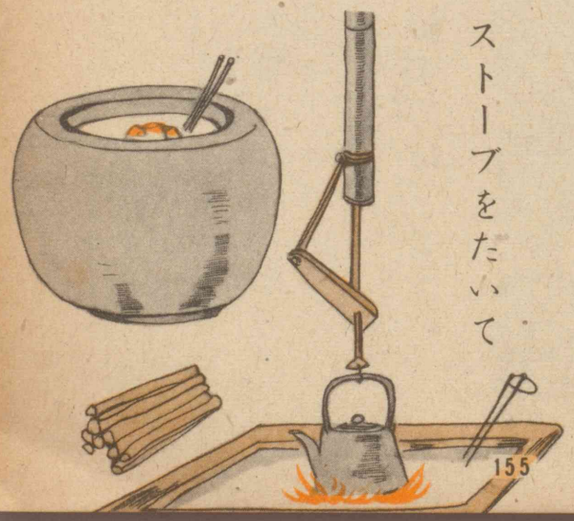
と、まさおはいいました。

「朝、学校にくると、火にあたれるのでいいわね。でも、教室の中ぜんたいが、あたたまるとよいのだけれど。わたしのせきは、教室のうしろの方だから、時間中は寒いのよ。」

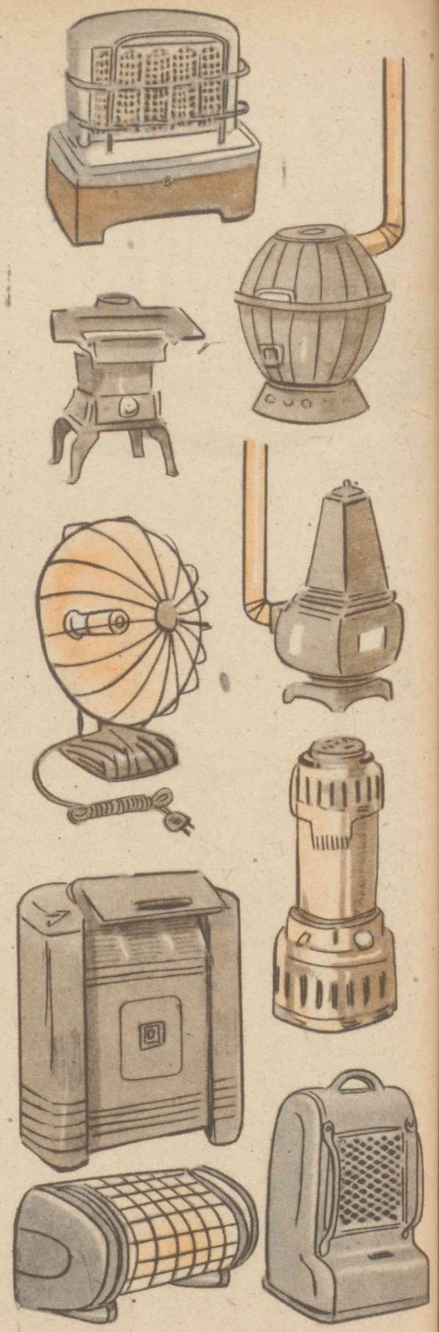
と、けい子がいいました。

「ぼくが、このあいだほけん所にいった時、ストーブをたいていたので、部屋の中はあたたかだったよ。火ばちではその所だけしか、あたたかくならないものね。」

と、三郎がいいました。



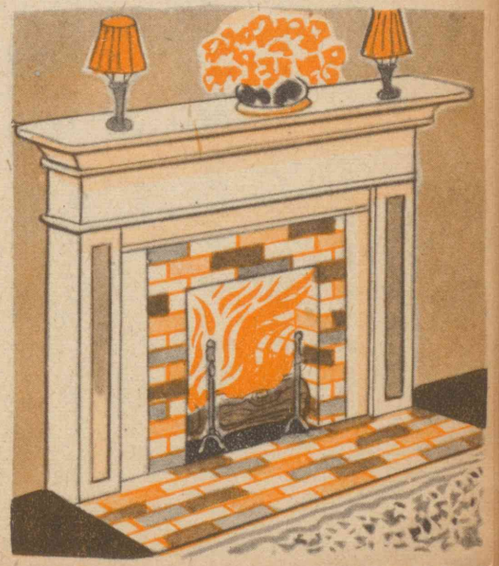
「やあ、おはよう」。
と、先生がはいってこられました。
「けさは、みんなでなにを話していたのですか。」
と、おききになりました。
「部屋をあたためることですか。みなさんのお家では、どういうものでへやをあたためていますか。」。
と、おたずねになりました。はつえは、
「家では、いろりにたきぎをくべて、みんなであたります。」
と、いいました。まさおは、
「家では炭を使っています。」
と、答えました。そこで先生は、
「けさの勉強は、へやをあたためることからはじめましょう。



それには、ねんりょうのことも、いっしょにしらべてみなければいけませんね。」
と、おっしゃいました。
そこでみんなは、今、先生のおっしゃった問題をしらべはじめました。みち子はと書室の本を見て、ストーブのねんりょうには石炭のほかに、石ゆや、ガスや、電気ストーブのあること

を知りました。たけしはオンドルやペーチカや、西洋のろのきれいなしゃしんを見ています。はつえは、今、火ばちやいろりを使っているのは、大むかしのくらしとあまりかわっていないと思って先生にお たずねしました。先生は、そこで、みんなの方にむいて、

「大むかしの人のすんでいたあとを見ると、家のまんなかには、ろがあって、そこで、物をにたり、やいたり、



またへやをあたためたりしていました。今は、いろりのある所とざしきとはべつにしていますね。それでも、まだむかしのように、いろりから出るけむりのために、家の中がすすけてくらくなります。また目もいためるのです。それで、炭をくふうしたのでしょう。むかしの人は鉄や銅をとかすような仕事は、みな炭でやりました。あんな大きな奈良の大佛も、銅を炭のねつでとかしてつくったのです。」

「では、先生、むかしの人は、石炭を使わなかったのですか。」

と、どしおがたずねました。先生は、

「今、一ばん多く使われている石炭や、石ゆは、むかしの人々はもえる石、もえる水といって、めずらしがりましたが、けむりが出るのでいやがったようです。かていのねんりょうに

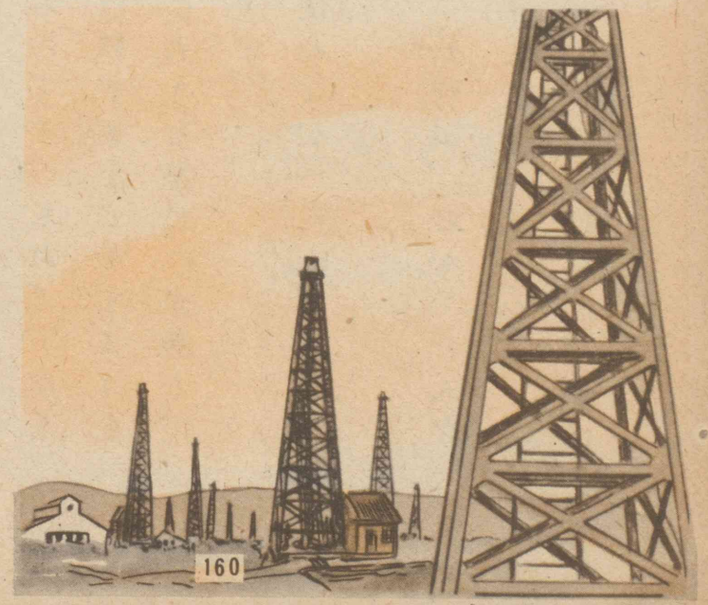
は、むかしはたきぎがおもで、炭はみぶんのよいものだけがへやをあたためたり、寒い時にあたったりするのに使って、ふつうは、金ぞくをあつかう職人だけしかもちいなかったようです。」

「先生、人がひろく石炭や石ゆを使いだしたのは、今からなん年ほどまえからなのですか。」

と、まさおがしつもんしました。

「そのことについて、だれか今しらべた人はありませんか。」

と、先生がみんなにおききになりました。はつえが、二百年ほ



どまえからです、と答えました。

先生は、

「そうです。今は石炭や石ゆや鉄のおかげだといってよいのです。今わたしたちが見る、おり物きかいは、石炭のねつで鉄をとかしてできるのですし、じょう気きかん車も、大きい汽船も石炭をたくことによって動くのです。自動車が走るのも、石ゆからつくるガソリンをねんりょうとしているのです。世の中がすすんでいくにつれて、

ますますきかいの力がひつようになります。そのきかいをつくったり、動かしたりするのは、鉄と石炭と石ゆです。」

と、先生がおっしゃいました。

「それでは、炭はだんだんいらなくなるのでしょうか。」

と、はつえがしつもんしました。先生は、

「さあ、それはどうでしょうか。日本人のくらしのしかたが、きゅうにかわることはないでしょうから、わたしたちの家では、やはり、炭はひつようなものだと思います。」

と、おっしゃいました。そこで、としおが、

「ぼくは、毎日、炭を使っているのに、まだ、どうやって炭をやくのだか、見たことがありません。」

といったので、みち子も、

「わたしもありません。先生、このつぎのにちよう日に、みんなと炭をやく所を見に、山へ出かけましょう。」

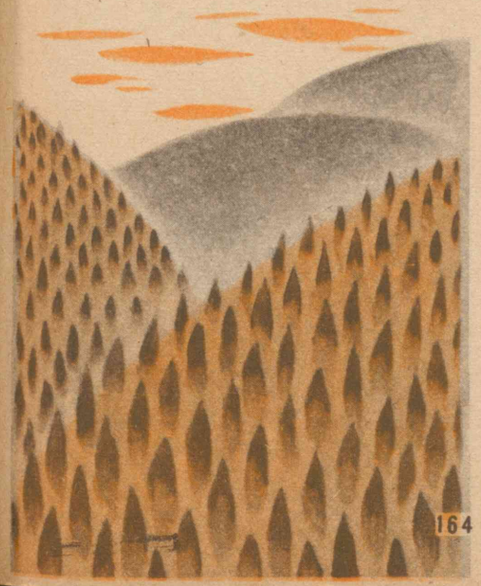
といったので、先生もさんせいなさいました。

晴れたにちよう日に、みんなは先生につれられて、炭やきの山田さんの所へ行きました。山田さんは、みんなのしつもんに答えて、ていねいにせつめいをしてくださいました。

「くぬぎ、なら、かしなどがよい炭になります。この炭やきがまの中に、木を切って入れて火をつけます。木がよくもえたころかまの口をふさぎ、火をけしてからとり出すのですが、どんなよい炭になったかと思ってとり出すこの時が、一ばんたのしみですね。炭のさけめがきくの花のようになっているのが、よいできなのです。」

まさおは、寒い冬の山で、炭やきの人たちが、くろうしてやいた炭なのだから、むだに使ってはもったいないと思いました。けい子は帰り道で、白いいきをはきながら、

「あの人たちのおかげで、わたしたち



は寒い朝でも勉強できるのね。」

と、いいました。むこうの山を見ると、木がきれいにならんでうえられています。みんなは、このまえ、せい材所を見に行った時のことを思い出しました。その時、せい材所の人は、

「毎年のように、あちこちに大水の話をきくのは、山の木を切るばかりで、木をうえることをしなかったからです。森や林は人のくらしに、ずいぶん役だっているのですから、やたらに切ってはいけないのです。」

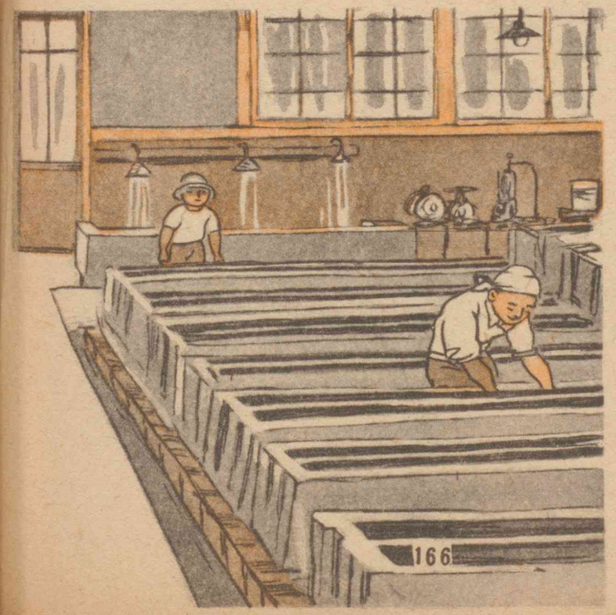
と、話してくれました。学校へ帰ってから、先生は、なだれをふせいだり、海岸

のすなが風でとばされるのをふせいだりする、ほあん林についての話をしてくださいました。

山道をおりてくると、おびのように白くながれている川のこちらに、よう魚場が見えます。

「山の雪がとけるじぶんには、あのよう魚場で、たまごからかえったさけやますの子が、川にはなされますから、その時にはみんなで見に行きましょう。」

と、先生がおっしゃいました。とし子が、なぜ毎年はなすのですか、としつもんしたので、先生は、



「さかなは、人がとりすぎるから、だんだん少なくなります。それでさかなによっては、とることをやめさせたり、さかなのたまごを人がかえして、川にはなしたりして、ほごするのです。さけやますは自分のそだつた川をわすれないで、大きくなってまたもどってくるのです。」

と、おっしゃいました。まさおは家に帰って、この話をおとうさんにしますと、おとうさんは、御木本幸吉のしんじゅがいのようしょくの話や、十和田湖のべにますのようしょくの話をしてくださいました。

○井戸と水道

「やあ、きれいになったね」。
と、そうじのおわった教室の中を見わたして、先生がおっしゃいました。
「水道のこしょうがなおって、ぞうきんがけの水をたびたびかえることができたから、きれいになったのだと思います」。
と、ひろしがいいました。
「なるほど、たしかにそれもあるね」。
と、先生は、わらいながらうなずきました。

「先生、どうして水道は、こしょうしたのですか」。
と、はつえがたずねました。
「タンクに水をくみあげるモーターがやききれたのです。水の使いかたがはげしくて、モーターが動いていたためです。みんなの中で水道せんをいたずらしたり、せんをしめておくのをわすれたりして、水をむだに流すと、モーターがまたこしょうしますよ」。
「また、水が出なくなるとたいへんだから、みんなで気をつけましょうよ」。
と、はつえが、心配そうなかおをしていいました。

まったく水道がこしょうしていたこの二しゅう間は、よしおにとっていやな日ばかりでした。学校にある二つの井戸は、いつも手や足をあらう人、水をくむ人がいっぱいでなかなか用がたせません。ことに雨の日などは、なきたくなるようでした。そうじの時間に水をくむのもたいへんでしたが、それよりも、もっとこまったのは、のどがかわいて水をのみたいと思った時に、のめなかったことでした。この井戸の水はからだによくないので、まえから、のむことをとめられていたのです。

「早く、水道がなおればいいなあ。」

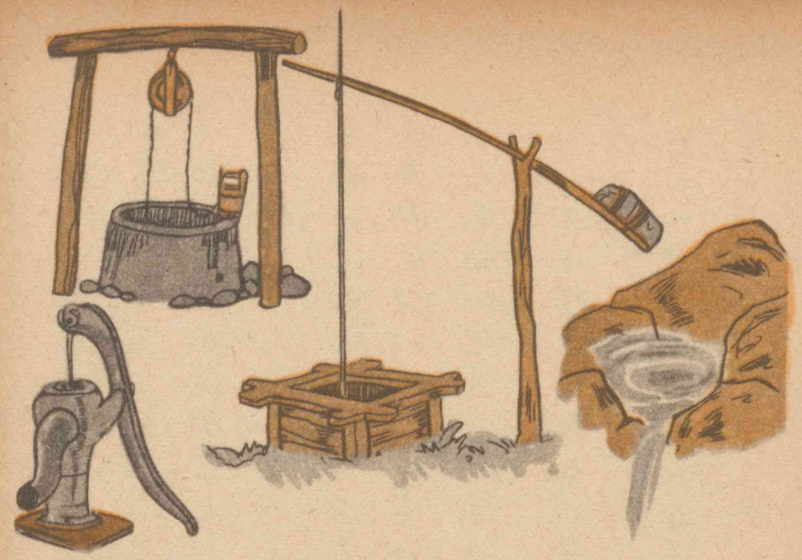
と、だれも思っていました。この学校の水

道の水は、タンクの中でまざりものがきれいにこされるしかけになっているので、安心していつでものむことができるのです。けれども、水道がこしょうして、のみ水にふじゆうしたり、そうじにふべんだったりしたことから、よしおたちは、今までなにも考えたことのなかった井戸について、いろいろ考えたりしらべたりしました。よしおたちは、どんなけんきゅうをしたのでしょうか。

よい井戸とわるい井戸（よしおのけんきゅう）

「よい井戸は、どんなふうにできているだろうか。」

と、ぼくは考えました。



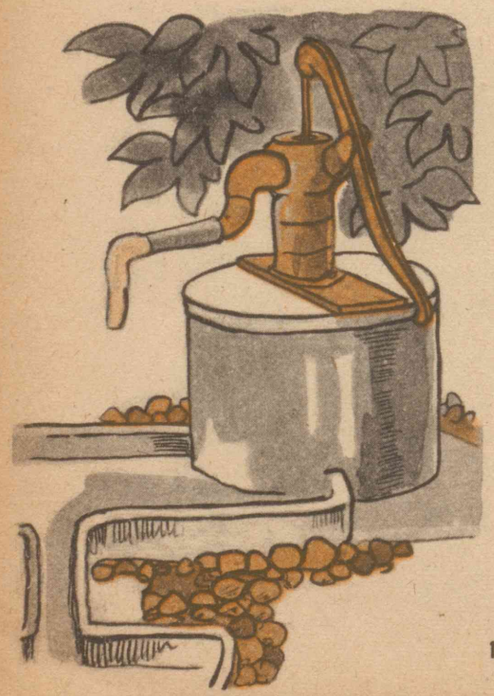
これをしらべるには、じっさいに方方の家の井戸のようすをしらべるのがよいと思って、なんげんかの家の井戸を見てまわりました。

はじめに行った新作さんの家は、つるべ井戸でした。ポンプ井戸のようなふたがありませんから、ほこりなどがはいりやすいように見えました。

それに、井戸のまわりがぬかるみになっていて、ところどころにどろ水がたまっています。下水がうまくできていないからでしょう。（この水が、土

の中にしみこんで、井戸の水とまざるのかと思うと、ちょっときみがわるくなりました。）

つぎに行ったのは、林さんの家でした。ここの井戸もポンプでしたが、コンクリートのふたがついているし、まわりもセメントでかためてあるので、これなら、ほこりやきたないものが井戸水にまざることはないだろうと思いました。これに、もうひとつ感心したのは、下水がしっかりできていることでした。このように方々の井戸をしらべてあるいていると、ぼくはもっと気をつけなければいけない問題をみつけました。それは、小川



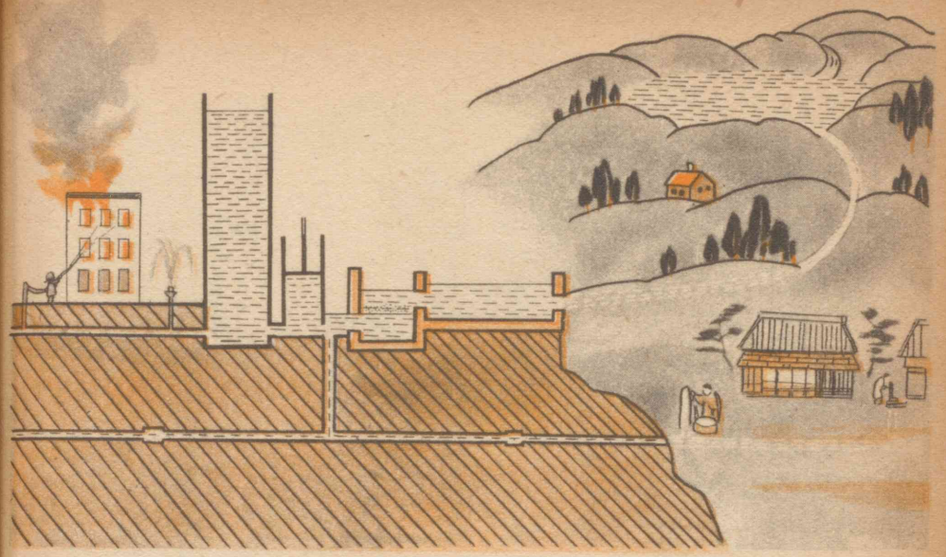
でなべやかまをあらったりすることです。これはたいへんえいせいによくないことだと思いました。川上で、でんせん病が出た時のことを考えると、おそろしくなります。このようなことは、一日も早くやめてもらいたいと思いました。

ぼくは方々の井戸をしらべて、よい井戸とわるい井戸のちがいがわかりました。

水がなければ、人は一日も生きてゆくことはできません。のみ水はもちろんのこと、物をあらうにも、井戸水を使っているのだから、よほどえいせいに気をつけて、井戸をしっかりつくらなければいけないと考えました。

○べんりな台所（はつえのけんきゅう）

わたしの家は、のうかですから、入口をはいった所にひろい土間があります。そして、この土間には、大きなかまどがこしらえてあり、土間のつぎにはろがきってあります。ここが、わたしの家の台所であり、また食事をするところでもあるのです。田や畑のしごとから帰った時に、はだしのままで食事の用意をしたり、食事をしたりすることができるので、べんりですが、火をたく



むりが家の中にたちこめるようなこともありません。すいじどうぐもきちんとせいとんされています。

このような台所で仕事ができたら、どんなにたのしいことだろうと思いました。

だい一にすいじのてまがはぶけて、ほかの仕事ができるでしょう。

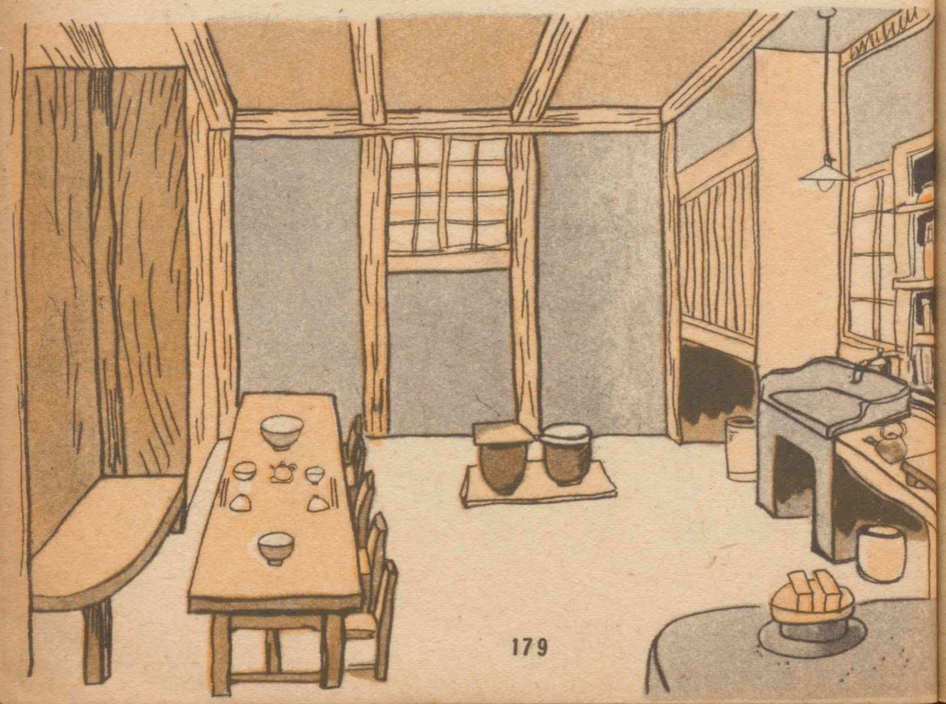
それから、気持よくはたらけて、仕事がはかどると思います。また、なんでもせいけつになると思います。

帰り道に、わたしはおとうさんから、

町の水道がどのようにひかれているかという話をききました。

わたしの家に水道がひけるようになるのは、まだまださきのことでしょうが、私の家の台所をもっとあかるく、せいけつで、べんりなものにしたいと考えています。

よしおや、はつえたちは、このようなことをけんきゅうしたことから、村ぜんたいのくらしを、今よりもっとべんりにするには、ど



うしたらよいかということを考えはじめました。みんなでいろいろ話しあいもしました。

やはり、水道と下水のせつびを、ととのえたいと思いました。町のように水道がひけて、下水のせつびがととのったら、どれほどくらしがべんりになることでしょう。また、でんせん病にかかる人も少なくなるでしょう。村は、どんどんと明かるくたのしいところになるにちがいありません。

まさおたちは、水道や下水のせつびをするのには、どうしたらよいのか、先生にお話をきいたり、本を読んでしらべたりしています。

べんりなくらしになれている人たちには、村のくらしは、ふ

べんなことが多いと思われるにちがいありません。けれども、ふべんなくらしをしてきた村の人たちにとってはちょっとしたべんりさも大きなよろこびとなります。

まさおたちは、村のいろいろなもんだいについて勉強しました。そうして、世の中がどんどんすすんでいるということを知りました。村に電鉄の

駅ができたり、バスが通るようになったことから、村のくらしがきゅうにひろがって、村の人が町に気やすく出かけたり、町のべんりなものが、どんどん村にはいってくるようになりました。村と町のつながりは、むかしとくらべものにならないほど深くなりました。

町から、村にはいったべんりなものは、おどろくほど村のくらしをかえました。電とう、ラジオ、いろいろなきかいやどうぐなどは、どれほど村のくらしを明かるくたのしいものにしてくれたことでしょう。

村の人たちのくらしは、だんだんとゆたかになっています。りっぱな学校もできましたし、村の人たちが、いつもけんこうでくらせるように、ほけん所もできました。むかしの人の強いねがいと、たいへんなほねおりが、実をむすんだわけです。けれども、まだまだ問題がたくさんあります。

まさおたちは、もっとほかのことについて、深く勉強したいと思いました。そして、明かるく、ほがらかに、世の中のためにつくせる人になりたいと思いました。

さくいん

あんどん　一四三
家　六三
市　八三
いかだながし　一二三
いろり　一四七
井戸　一七〇
上杉鷹山（うえすぎようざん）　五八
江戸　九二
エジソン　一四八
おもや　一〇三
おびのこ　一一九
オンドル　一五七
おさ　一二八
おり物　一三〇
かい道　二一
かご　二二

かわせ　四一
かへい　八八
かぶき（しばい）　九二
かいこ　一三四
ガスとう　一四二
旧道　二七
きかいがんな　一一七
きかいのこぎり　一一七
木馬（きんま）　一二四
きぬ　一三四
けん道（県道）　五
原木　一二二
下水　一八〇
こううんき　一〇六
こびき　一二一
サイレン　三四
しょう屋　五三
しょうぐん　二四
職人（しょくにん）　五六
新田（しんでん）　五九
商ぎょう　七四
じょうか町　七五
集魚とう　一五三
ストーブ　一五五

炭　一五九
炭やき　一六三
水道　一七六
せき所　二三
千ばいねこき　九九
せい材所　一〇九
石炭　一五九
石ゆ　一五九
そくたつ　三九
タブレット　一六
大名　二〇
たいへいよう（太平洋）　三三
だっこくき　一〇〇
台所　一七五
ちゅうざい所　五
昼光燈　一四一
つううんがいしゃ　一五
電鉄　六
電話　三七
電ぽう　四〇
出屋敷　六〇
デパート　七八
手ばた　一三一
でんせん病　一七四

トラック　一〇
トンネル　二五
とうげ　二五
とう台　三一
徳川吉宗　五八
トラクター　五九
問屋　九二
とりいれ　九五
十和田湖　一六七
名ぬし　四九
長浜ちりめん　一三五
ナイロン　一三九
二宮尊徳　五二
西じんおり　一三一
年ぐ　五四
ねんりょう　一五四
のうぎょうきょうどうくみあい　五
のろし　三六
のうぐしらべ　一〇四
バス　六
はたおりきかい　一三一
ひきゃく　四三
ビルディング　七六
ひうち石　一四六

ぶし　五五
別所　六〇
ペーチカ　一五八
ポイント　一六
細川重賢　五八
ほけん所　一五五
ほあんりん　一六六
丸のこ　一一九
道しるべ　一二
御木本幸吉　一六七
むせん電話　二九
むせん電しん　三四
モーター　一四
もみすり　一〇〇
もめん　一三五
役場　五
みやこ　八四
用水　五〇
米沢おり　一三五
よう魚場　一六六

先生方と御両親のために

この本は四年生の社会科の教科書としてつくられたものです。編さんの方針としては、学習指導要領・社会科篇Ｉと、その補説の主旨をあらわすことにつとめるとともに、子供の生活と発達とに即することを旨としています。そのために、子供が直接経験している日常の生活の場である地域社会の現実の理解から出発して、過去の生活と対比することにより、われわれの祖先が常にきびしい自然に適応、乏しい資源を創意

と工夫とさらに人々の協同とによって、利用保護培養して、その生活をよりよく又明かるくすることにつとめてきたことを説いてあります。そして工業の進歩によって、われわれの生活が飛躍的に豊かになったことを考え、祖先たちが、自分の生活の問題を解決しようと努力したそのあとを、子供に自分たちの問題として理解させ、子供の程度に応じてこれを改善していこうとする熱意を高める資料となると思います。

以上は全体を通じての方針ですが、特に第一の「私たちの村」は補説の地域社会の現在と過去の項によりつゝ、全巻の序説の如き役割をもたしてあります。第二の「べんりな世の中」は補説の、昔の交通々信の項により、交通々信が如何に

進歩し、そして今の便利な社会が建設せられているか、将来どのようにのびていくのであろうかという、見とおしを与えたいという意図をふくんでいます。第三の「今とむかし」は補説の地域社会の過去と現在、及びむかしの商工業の項を中心として、祖先たちがその自然の環境の中で、生活をよりよくきりひらくために努力したあとを回顧し、同時に補説の資源の保護利用を参しゃくすることにつとめてあります。

第四の「きかいの力」は、補説の資源の保護利用の項に中心を置き、資源の保護利用により生活が著しく向上躍進したこと、又同時に機械文明の進歩によって、われわれの生活が豊かになってきたことを、子供たちの生活経験の中に取材し

て、衣食住のそれぞれに於て子供に印象せしめようとつとめました。最後の「たのしいくらし」は同じく資源の保護利用の項を考えて、現在のわれわれの生活が豊かに明かるくなってきていることを子供に考えさせつゝ、同時に現在の私たちの生活はまだまだ満足すべきではなく、そこに子供たちの課題の存在することを発見させて、その解決の方向を子供たちに考えさせるような意図をもっています。

編修委員

東京家政大学学長　青木誠四郎
東京都桜田小学校教諭　室井光義
同　片岡龍一
東京学芸大学追分付属小学校教諭　松村謙
東京学芸大学大泉付属小学校教諭　染田屋謙相
東京都大泉高等学校教諭　森田康之助
東京学芸大学竹早付属小学校教諭　野口竹夫

さし絵・表紙
新井五郎　中島章作

Approved by Ministry of Education (Date Sep.28, 1950)

世の中はすすんでいる（小学校社会科第四学年用）

昭和二十六年三月十日印刷
昭和二十六年三月十五日発行
（昭和二十五年八月十二日文部省検定済）

定価　円

12 二葉　小社 403

著作者　代表者　青木誠四郎
発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社

なまえ

広島大学図書
広島大学図書
0130449981

二葉株式会社